

---

**f i o r e t t i**

十六夜 亞咲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

f i o r e t t i

### 【Nコード】

N 6 4 2 4 M

### 【作者名】

十六夜 亞咲

### 【あらすじ】

田舎か都会か、と言われれば田舎の高校に通う高校生・有士。彼と、幼馴染みの兄妹、その両親、腐れ縁の親友の、「天啓」という能力とともにある日常を描いています。

馬鹿みたいなバトル、抑えられている恋愛感情、知らされていなかった事実、罪に縛られる心・・・

有士は何を選択し、何を見つけたのか。

どたばたあたふたもやもやどきどきの、平凡学園ファンタジー。

## 始まりの回帰（前書き）

当作品は、以前携帯HPに掲載したことがあります。

また、コミケにもコピー本で無料配布で置いたこともあります。

数年経ち、続きのイメージができてきたので、もう一度公開したいと思いました。

文章や表現の一部が変わっています、一応念のため。

読んでいただいた方が、小笑いしてくれたり、物語に出てくる誰かに、少しでも感情移入していただけたら幸いです。

## 始まりの回帰

紅く、赤く、あかく、アカク：

磔にされ、槍に貫かれた身体は、燃え上がる炎に包まれていく。

天の使い：『天使』と呼ばれた二人の人間が、焼けていく。

一人の少年が、その姿を遠くから見ている：

この時から十数年前、西の各国では、伝承に残るだけの筈の強力な多数の悪魔や悪霊、堕天使による侵略が始まっていた。一人のある狂った聖職者が、世を恨み、悪意ある者の召喚の儀式を行ったのだ。その人間は喰われ、制御を失い暴走した方陣の中から、あらゆる悪が溢れ出した。

彼らによる略奪、破壊、強姦：人々には為す術もなかった。

しかし、神や天使はそれを黙って見ているわけにはいかなかった。

地上人を守るため、舞い降りて来たのである。

だが、悪魔達の群れは彼らの想像以上の力を持っていた。神格者や上級の天使は立ち向かえるものの、下級の天使では歯が立たない程強力になっていたのだ。

神格者や上級の天使から下級の天使に力を分け与えることは、力の大きさが違うだけで同じ力を持っていることになるため、受け入れる器がない。だが、何の力も無い人間に『奇跡』を与えることはできた。

そして、神々は、力を受け入れることのできる器を持つ、適応する人間に、後に『天啓』と呼ばれる力を与えた。その証に、それぞれことなる『刻印』を身体につけたのである。

『天啓』を受けた人間には、天使の力を使役することができる能力、そして類い希なる運動能力・視覚・聴覚が備わった。人によってそれぞれ使役できる天使は違うが、それぞれが小さな力でも、人に備わっている潜在能力と天使の力が、悪魔達に対抗できる程にまで強まったのである。

当時より伝説とされていた聖ペテルギウスや聖ジャンヌ・ダルク、聖母マリアといった、死してなお高潔な魂をもつ英雄達が、神の力により顕現し、人々を救ったと言うのも有名な話である。

戦いは長くは続かなかった。『天啓』を受けた半数近くの人間の力が、あまりにも強大だったからである。その力は、上級天使に勝るとも劣らないものであった。人の未知なる力と天使の力が合わさるのだから、その爆発力を考えれば当然、という解釈だろう。何せ、神の為すことは人々には理解しがたいことであるから…。

戦いは終わり、地上には戦いの傷跡と、『天啓』を受け、力を持つ者が残った。それから数年、神や天使達は地上に顕現することが、ぱったりと無くなった。確かに、神格者や天使達の力は、大きい。だが、戦いという物は、かくも厳しい物である。来るべき次の「聖戦」に備え、休養に入っただけである。そのようなことを人々は知る由もない。そうしたことから、地上に姿を現さなくなった天使達。後に、『天啓』を受けた人間を、だんだんと人々は天の使い、『天使』と呼ぶようになる。

大衆により、『天使』と呼ばれるようになった『天啓』を受けた人々。彼らはどこへ行っても、英雄として崇められるようになった。力を持つことにより、自分の国の王に呼ばれ、側近として働くようになった者も多い。

しかしそれ故、彼らを良く思わない者達もいた。『天使』と呼ばれる人間が城に入ることに、それまで王室に仕えて、『天使』に立場を追われる形となった者が、各国より7人集まり、ある作戦を

実行した。

大衆は、周りに流されやすく、上に逆らえない、それでいて結束力のある人間の集まりであることを知っていた彼らは、それが強みであり、利用する手段だった。

彼らは、とある森の中にある使われてない一軒家を、人が暴れたかのように細工した。

そして、『天使』そっくりな格好をした実行犯が、一人のターゲットの町人を誘拐し、薬で眠らせた。

同時に、その『天使』を、ターゲットとなった町人になりすまし、同じように誘拐し、薬で眠らせた。

それから2日後。

一人の町人と『天使』が、町から消えたという噂が、近隣に行き渡る。いくらかの目撃者は、正しいことを言っている。しかし、違う場所、同じ時刻に、両方がお互いをさらうという怪奇と思えないこの事件は、混乱した情報を多々生み出した。

まさにそれが、彼らの狙いだった。

後は、森の中の一軒家で、『天使』が町人を殺したように工作して、まるで『天使』が町人を殺したことを後押しするように、「森で友人数人と狩りをしていたら、近くに一軒家を見つけた。ちょうどいいから休もうと思ったら、変なおいがした。何事かと思って中を覗いたら…」とでも言って、自分たちが、無関係の第一発見者にもなればいい。怪しまれることなど、何もないのだから。

計画は最終段階に入った。あとは、町人を殺し、自分達がやったという証拠を無くし、『天使』が殺したように見せかけて、通報すればいい…。

『天使』を椅子に座らせ、その前で町人を殺そうとした、その時だ

った。

『天使』が目を覚ましたのである。やはり、普通とは違う人間。それを分かっている、通常の倍以上の濃度の睡眠薬を使ったのだが、

『天使』の血は免疫力・回復力も長けていたのだ。

『天使』の目の前では町人が殺されようとしている。

『天使』は彼を助けようとし、斧を持つ殺人計画者に対して力を使う。

だが、しばらく薬で眠らされていた所為で上手く力が制御できなかった。

衝撃が、全員を襲う！

標的でなかった誘拐被害者はかすり傷程度で済んだ。だが、悪魔に對抗するために授かった力で・・・人を殺してしまったのである。原形をとどめないくらいまで無惨に切り刻まれた幾つかの死体。ひどい悪臭に、誘拐被害者までもが目目を覚ました。目の前の『天使』は、何かに怯えるように立ちつくしていた。『天使』も町人も、大量の返り血を浴びている。町人の傷までもが隠れるくらいに。

町人は逃げだし、その有様を警邏隊に伝え、『天使』は捕まった。

『天使』を罪人に仕立て上げようとする計画は、実行犯が死ぬという波乱含みだが、奇しくも成功したのである。このとき、一軒家の外で見張りをしていた二人は逃走したが、その後捕まり罰せられたという。

それから、『天使』の裁判が始まった。誘拐に関しては、死んだ7人の遺留品の中に変装道具と凶器があったことから、咎められなかった。しかし、『天使』の証言から、捕まったとはいえ、見張り以外の人間を5人も殺したのは事実。その『天使』は、危険な力を持つ罪人として、数日後に処刑されたのである。

事件の話は、時間をかけることなく各国へ広まっていた。似たような手口で『天使』を罪人にし、処刑したという事件も起こった。その度に、『天使』達は恐れられ、ついには存在自体が罪と言われるようになった。一つの事件と噂が、大衆を動かす。作戦は、ここまで見越していたことだった。その成果を、彼らが見ることはできないのだが……。後に、この後に続く連鎖的事件は『天使狩り』と呼ばれた。

全国各地で、『天使』は磔にされ、槍で突かれ、焼かれた。そして、『天使』達が『天啓』を受けてから十数年の後。最後といわれた二人の『天使』が、焼かれていった……。



## 始まりの戒帰

だが、その力はまだ残っていた。神でさえも予想し得なかったであろうことが、起こったのである。

数人の『天使』は、子供を残していた。

神は、その血を後世に残さぬよう、『天啓』を与えると同時に、その繁殖能力を失わせていた。だが、特別な力を持つ人間の持つ根元の生命力は、それさえも上回ったのである。

そして、その子供にも『天啓』があり、天使の力を使役することができる能力が備わっていた。とはいえ、直接『天啓』を受けたものではない。『天使』ほどその力は強くなく、また手の甲にあるはずの『印』も、有る者もいれば無い者もいた。

だが、各地で、その能力を無意識に発動させ、天使の子ということが明らかに、そして、何も知らずに処刑される。

そうして、数人残された『天使』の子達も、全て排除されたかのようになされた。

しかし、その地に残された、『天使』同士の子。

名を、ロウルと言った。

彼には、その力を制御することができた。

遺伝することにより不安定となるはずの力だが、『天使』同士が交わって生まれたそのロウルは、血の結合にもかかわらず安定した力を使うことができた。しかし、その力故、『天使狩り』の後には表に出せず、その力を隠しながら生きていた。

だが、そんな生活も長くは続かなかった。

ロウルには、当然家族はいなかった。しかし『天使狩り』がまだ各国で行われているようなとき、ボロボロになって彷徨っていたところを、一人の老人に救われたのである。

自分は『天使』同士の子だということを打ち明けた。だがその老人は、そんなこと関係ない、むしろ『天使』には助けてもらった恩があった、と言い、かくまってくれたのだ。しかも、生活できる場もくれた。ロウルは、迷惑は掛けまいと、普通に街に出て働き、老人の世話をしていた。

『天使狩り』が始まってから8年後、ロウルが17歳の時、老人は言った。「天使の力を使えると言ったが、死ぬ前に一度見てみたい」と。世話になった人だから、気は進まなかったがその力を、人がいないと老人に連れられて来た森の中で、その力を見せた。

その場所は、ロウル自身の力が、両親が『天使』とはいえ直に『天啓』を受けた力ではないから、それ故に微妙に不安定な力が暴走する前に、その力を発散させていた場所の近くだった。

しかし、力を使い終えた瞬間、何者かに後ろから羽交い締めになれ、捕らえられてしまったのである。

「天使」として捕らえられた者の定めは、処刑のみ……。

処刑までの数日の間、地下牢に閉じこめられていたロウル。力さえ使えば脱出できないことはないが、親の元へいけるなら、それでも

いいと思っていた。それに、どうせいつかこうなることはわかって  
いたから・・・。

捕らえられて二日目の夜中。見張りの番兵達から思わぬ言葉が飛び  
出した。

「あのじーさんもなかなかやるよな。たまたま森で『天使』の目撃  
証言が出たからってなあ…」

「金のために、ただ一人の家族みたいな人間を売るんだからな」

「いくら『天使』とはいえ、別に危害与えてるわけじゃないのに、  
なんだかなあ…」

「所詮、今の世の中じゃ金なんだろう」

「ああ。だが、同情することないな。初めから、『天使』を保護し  
た時点で言っていれば済んだものを…」

と。  
理解してしまった。

各国に、『天使』の生き残りや子がいるという話は聞いたことがあ  
った。そして、その『天使』に直接結びつく情報を提供した者には、  
多額の報奨金が出ることも。

今まで世話してもらって、世話をして、支え合ってきた人に裏切ら  
れたということも、同時に分かってしまった。まさか、自分に良く  
してくれた、自分の唯一信頼していた人に、しかも金のために売ら  
れたなんて…。悲しみと、絶望に打ちひしがれた。しかし、あの老  
人がそんなことをするはずが無いとも考えていた。とても、信じら  
れない。

処刑の前日。

ロウルは、最後に老人と会って話をしたいと頼んだ。それが叶い一度だけ会って話をさせてくれるという。

そして、老人が独房の前に現れた。

「……どうして僕を売ったりしたの？ お金が必要なら、僕が稼いだのにさ」

老人は、見張りに聞こえない声量で、ロウルに言った。

「……目撃情報が出てから、すぐにそれがロウル、お前のことを言っているのだとわかった。お前が街に出ている間、兵士が家に来た。そして、『ロウルを引き渡せ。でなければ、かくまったお前も同罪で処刑する』と言われてな」

「……………」

「そして、協力すれば望むまでの金をやろうと言われた。…仕方なかったんだ、自分自身が生きるためには。…勝手だとは思うが、恨まないでくれ…」

「…そっか」

…やはり、彼は自分の意志じゃなかった。処刑すると脅迫されれば、誰だって自分の身を守るだろう。ただ、許せない。

国も『天使狩り』とはいえ、脅しなんて卑怯な手を使うなんて…。そう考えていた刹那。目の前の老人が、ばたり、と倒れた。見れば、顔は青ざめて、苦しそうだ。すぐに見張りの番兵を呼んだが、面倒そうに言う。

「あー、このじーさん最近頻繁に発作起こしてたらしくてな。今日もつれてくる前にヒーヒー言ってたさ。お前のことで考えすぎたんじゃねえのか？ 罪人のくせに。ま、老い先も短いし、いいんじゃないの？ 最後に前さんと話できてな」

と言った。

ロウルは『憎しみ』と言うものを実感した。

「：目の前に苦しんでる人がいるのに、それを助けなくて何が国の兵士だよ」

「あ？甘いこと言ってんじゃねえよ。：まあ、いずれにしろこのじーさんも殺されるんだよ」

にやりと、番兵は口元をゆがめた。

「国が脅迫して『天使』を出せなんて言ったのが民にばれたら、信用が落ちるってもんだろ？ハナから口封じに殺す予定だったんだよ。お前も明日には処刑なんだ、じーさんの後追えて満足だろ」

「……………ラファエラよ：ケテル、ヘセドにおいて、そなたを使役せん……」

ふわ、と、目を開けるのも辛い程のまばゆい光に老人は包まれて、意識を取り戻した。

「おじいさん、逃げるよ」

「くそっ…逃がしてなるものかぁ!!」

番兵は槍を持ち出し、老人に向けて突きを繰り出した。独房の番兵を任されるだけのことはあって、慌ていてもその突きは正確。脚を一突き、引き抜いて崩れたところに胸を一突き。再び引き抜くと、血溜まりの中に老人の身体は崩れた。

『天使』の力が偉大で強力とは言え、完全に息の根が止まった人間を生還させることができる程、都合のいい物ではない。再び、天使の『癒し』の力を借りたが、老人は息を吹き返すことはなかった。

独房越しの目の前には、血だらけで転がった老人の身体。立ちつくす、返り血を浴びた番兵。様々な感情が、ロウルに生まれた。ただ一人の理解者を失った悲しみ、切なさ、喪失感。憎しみを越えた、

目の前の番兵を殺したいという憎悪、憎悪、憎悪、憎悪。

「…ああああああああアアアアアアアアアアアア！  
！」

老人に拾われてから今まで、誰も憎んだことの無かったロウルが、感情を露わにした。怒りにまかせ、沸き上がる憎しみが力の暴走呼んだ。光がはじけ、突風が吹く。風は刃となり独房の鉄の扉を切り裂き、番兵をも切り刻んだ。

涙ながらに、ロウルはただ、叫ぶ。何事かとやってきた兵士も、たちまちの間に切り裂かれた。今まで、一度しかなかった怒りと悲しみ。両親が焼かれ、泣きながらも、親にいわれたとおり必死に逃げてきた過去の辛い思い……。

城を脱出し、森の奥へ駆け込み、感情を制御する。

滾る血が収まると共に、冷静になる自分。その瞳は、それまでのロウルのものとは、違っていた。

自分の、憎しみの対象。

それは、世界中の、悪しき権力者。

自らの利益のみを追求し、それでいながら人々に讃えられる、狡猾な権力者。

「天使」と勝手に崇め勝手に殺す、本当に身勝手な国王。

：排除しなければいけない。排除しなければいけない。はいじよしなければいけない。はいじよししなければいけない。はいじよしレバイケナイ、ハイジヨシナケレバイケナイ……。

自分と同じ悲劇を起こさないためにも。

ハジマリノカイキ：

それは、全ての始まりの物語。

人から人へと紡ぐ、切なさ、愛しさのための物語。

これから始まる、日常と非日常のための物語。

さあ、その日記を手に取り…そして、君もまた、綴るがいい。  
君自身の、物語を。

朝、ひとり、じゃない。

…なんだったのだろう、今の夢は。

ひどく現実的で、でも非現実的だった。

手は、じつとりと汗をかいて濡れている。

そうだ、時間は…？

時計を確認すると、目覚ましが鳴るより早い時間だった。

…準備するか。

桜が舞い、川のせせらぎが聞こえる中、俺はただ待っている。

二人が遅れてくるのはいつものことで、眠気を噛み砕きながらぼけ～としている。

いつからか、この場所で待ち合わせてから学校へ行くようになって  
いるのだが、いくら考えてもその理由を思い出せないでいる。小学  
生の時は学校行く途中で会って、それから一緒に行っていたが…。

…ばからしい。意味のない思考に耽るのは悪い癖か。まあ…い  
つもみたいに夜寝る直前に思考入らなくて良かったか。あれは辛い、  
一度深い思考に耽ると何かしらの答えが出るまでは寝付けないから  
なあ…。

結果、不眠症ボウイ。

「「おはよう、有土」」

同時に声をかけられた。





記録だね」

「さいですか」

「むう、やる気が感じられないぞ」

そりゃそうだ。こんなことでやる気出しても意味がない。

全く・・・無駄なことに気力や体力を使っていざという時にくたびれてることが多なあ。

「さつてと、私先に行ってクラス編成の紙もらってくるね」

言うと、とっとうてい行ってしまった。

「風速7Mの赤矢印みたいなヤツだな」

「半分は性格、半分は有、お前の所為だな」

実際その通りなので、何も言い返せない。

時々転けそうになりながらも、走る。というより、途中から低空で飛んでいた。それはもう高速で。

「全く、どうせ同じクラスなんだから焦る必要ないのにな」

「・・・ああ」

同じクラスだと知っているのは、俺と圭くん、一部の教師、圭くんとさっきの少女、「郁」の両親、と限られた人間だけだ。

そりゃ、あんな事があればそういう処置をとるのも仕方のないことだけだな・・・

いくら何でもあの人達は過保護というか、何というか：親心なんだろうけど。

「・・・い、兄さん、有」

「早いな…あの表現は的を射ている」  
「全くだ…」

我ながらの言語センスをしている。…いやこれくらい普通だろうか。

「早いな」

「とおーぜん。『ルヒエル』の力ですぐだよ。はい、これ」

と言って俺と圭くんに紙を渡す。  
どれどれ…。

ふむ。早々と発見。50音順で後ろの方だと見つけやすい。それに  
「山階」なんて名字、親戚以外じゃ他に滅多に見たこと無いからな。  
ちなみに、1組。

そして郁の名前を探していく。えーと「咲倉紀 郁」と…。発見。  
例によって同じクラスだ。なんかこう、期待を裏切らない物って案  
外つまらないな…。

「今年も有と同じだよ！」

「へいへい、それはそれはよござんしたね」

「あーもおリアクション薄いなあ。もったこお、嬉しさを全身で表  
現できない？」

郁は、その場でバンザイをしてみせた。

「馬鹿だな？お前は」

「あー！馬鹿って言ったやつが馬鹿なんだよお！」

「へー」

「むう～～～」

ああもう、くだらん。こうなると何故か郁は頑固になるからな。無視しておくのが最善策となる。

「まあまあ、こいつも嬉しいだろうさ。はずかしくてできないだけだ」

「って圭くん！？何言って…」

「そうなの？有」

「圭くん、いい加減なこと言わな…あれ？」

いない。やなタイミングで逃げ出すなあ…もう。

「有ってば、そうなの？」

「あほ、んなわけあるか」

「もお、恥ずかしがること無いのに…」

「……………（無視）」

…春だからな。わいてるやつがいてもおかしくないか。うゝん、日差しとささやかな春風が気持ちいいな…

がしいっ！！

腕に何かが纏わりついた。

「ん？」

「……………」

涙目で、そして無言で俺をじっと見つめていた。

「な…なんだ？いきなり…離せっての」

「有は、嬉しくないの？同じクラスになれたのに…」

うつつつつつ！！？？

思いつきり泣きそうだ。やばい。まずい！

まだ通学中の、同じ学校の奴がたくさんいて、早歩いている。もう体裁としてやばい。

そしてこの泣きそうな顔。必死にこらえてはいるが、そのうるうるした上目遣いは某核兵器並みにやばい。かわいすぎる！  
どうしたものか…

「俺も嬉しい」と言ってやる  
とにかく機嫌を直させる

「別に…」

って三択！？

と、とにかく、ここで泣かれては困る！

「お、俺も嬉しいぞ…」

「…ぐすつ、ホント？嘘じゃない？」

「あ、ああ嘘じゃないぞ」

確かに、嘘ではない。だが、そんな、全身で喜びを表現するほどではない。

しかしこいつもこんなことで泣きそうになるとはねえ。ま、それだけ郁にとっては大事なことだったんだろうな。

「あっ…」

郁がよろり、とゆらめく。

倒れないように、背中を支えてやる。

「どうした。いきなり…寝不足か？だから寝る前のヒンズースクワットはやめろとあれほど」

「ううん、そうじゃないよ。力使うときに『儀式』やり忘れたから…」

「焦って行く必要なかったのに、無茶するからだ」  
「ごめ〜ん」

てへへ、と舌を出して微笑んでいる。まあ、これもいつものことだな…。

「まあいい、次からちゃんとやれ。力が消えても知らんからな」  
「うん、ありがと…」

全く…怒られてるのに礼を言うなって…。  
郁から視線を逸らし、春の風景を眺める。  
誰もいない通学路に舞う桜の花弁は、どこことなく退廃美を感じさせる。

…。

…。

……？

誰もいない！？

ポケットからケータイを取り出し、時間を確認する。

始業式の日から遅刻なんて、したくはないよなあ。  
そおかあ、だからみんな、「早」歩いてたのねー…。  
はあ…結局俺も力使う羽目になるのか…。

「……………」

目を瞑り、郁を支えたまま『儀式』を行う。

左手の人差し指と中指を伸ばし、他の指は丸める。じゃんけんの『チョキ』のはさみを閉じた状態だ。

そのまま直線を描き、弧を幾つか描き、そして言葉を脳内で繋げる。

「ルヒエルに捧ぐ…シャキナー、ホドにより、そなたを使役せん…  
つと」

瞬間、体が浮くような感覚。

うまくいったようだ。体が軽い。

郁をお姫様だっこしてやる。こうする他に、連れて行く方法がない。

というか郁が、いつも『お姫様だっこじゃないとやだ』と駄々をこねるからだ。

恥ずかしくてあまりしたくはないのだが、人はいないし、今駄々っ子になられては、マジ遅刻しそうだというのもある。始業式の始まった後に体育館に遅れていくのは個人的にイヤだ。

風を操り、その風に乗るようにして学校へと向かう。何とか間に合いそうだ。

やっぱ、あったらあったで便利だな、この『力』…。

## タコ。(前書き)

一部過激表現がありますが、作者の心の叫びではないので、念のため。痛い、痛いやめてゴミこつち投げないで！



タコ。

何とかH Rに間に合い、適当に座る。と言っても、新学期なので俺たち以外は全員席を確保していて、他に空いている席がなかったからそこに座っただけだ。

黒板には、『明日席替えをするから、適当に座っておくこと』と書かれていた。当然の事ながら、教卓の真ん前の2つだった…。ま、一日くらいどうってことはないけどな。

その後すぐに去年と同じ担任が来てH Rもすぐ終わり、体育館に向かう。退屈な時間になることは明らかで、制服の下にこっそりとウオークマンとイヤホンセットしておく。

別にこっそりしなくても、大音量で聞いたりしなければ平気という、結構大雑把などのある学校なので、気にはしないのだが。

いつもこういう時は眠りこけている俺なのだが、今日は違う。なぜなら、昨日新しいC Dを買って、それにハマってしまったからだ。昨日のうちに録音しておいて正解だったぜ。

「行こ、有土」

「おー」

春休み中に行われた各部活の大会等の表彰が、壇上で行われている。そんな中で俺はウオークマンを聞きながらボケ々としていた。イヤホンからは、同じ曲がリピートで再生されている。

【変わらぬ時々を、あなたと過ごす時間を、大切にしたい

く、世界が終わるまでく…繋いだ指く先く、ぬくもりくを感じくして、幸せくを欲くしくがるく、私はくワガくママくかなく…】

歌詞も気に入ったが、曲が格好良くてたまらん。ちなみに俺は流行の音楽とかあまり聞かない。とゆうか嫌い。ポップスはまだいいのだが、ラップとかスカとか超嫌い。DJ系も超嫌い。あんなの音楽じゃない。あれ歌ってゆうか歌じゃねーし、しゃべってるだけだし、地声だし、歌詞が無意味にしか思えない。歌にしてもヘタクソすぎだし。叫ぶだけで脳がないものもある。あれでプロとかゆうなら誰でもプロになれるっちゅうの。それに、そういったジャンルはジャパニーズがやってはいけない。海外の、ジャパニーズよりもその分野で卓越したセンスを持つ人たちにのみ許されるものなのだ！誰にもできないことをやってこそ、プロと言えるハズだ。あれが認められてこの世界がおかしい。女性シンガーにおいても、レベルの格差が激しい。聴き入ることのできる人もいれば、聴くに堪えないほど愚かな歌声のものもある。レコード会社は一体何を考えてデビューさせているのだろう。見た目がいいからCDも売れるなんてゆうのなら、水商売やった方が十分儲かる。・・・辛口な自分が、ここにいる。

それはさておき…。

ほんといい曲だな、これ。

シビレルデスヨ…。

実はバラードバージョンも同時発売したのだが、金が回らなくて買えていない。

何で一枚のCDにしなかったのか不思議でならない。

とある音楽雑誌には、「全く別のモノとして聞くべきであろう」とか書いてあった。ま、ミュージシャンのこだわりなぞ知らんけど。

「ね、何聞いてるの？」

郁が小声で話しかけてきた。

「聞きたいのか？」

「うん：ひまなんですもによろぺくん」

「語尾まじでちゃんとお願ひします」

ほんと暇そうな顔してる。

別に貸してやっても構わないのだが…。

少しからかってみる

素直に貸す

って、今度は二択!？

まあ、あえて選ぶとするならば。

…少しからかってみるか。俺の小悪魔ちゃんがそう言った。

「いいぞ」

「ホント? ありがとう」

「ただし、ほっぺにちゅう1回」

「へ？」

「しかも今だ」

「え：ちゅうって：きす？ほっぺに？：って、今？」  
「そうだ」

みるみるうちに郁の顔が赤くなっていく。

頭から湯気でも出そうな勢いだ。

腕がゆらゆらしてる。

・・・おいおい、いくらなんでもこの反応はないだろう。

「おい、郁。冗談だ、真に受けるな」

「…へ？」

「ほれ、貸してやるから。しばらくしたら返せよな」

ウォークマンを郁の制服のポケットに入れてやる。

「あ、ありがとう」

やや複雑な顔をして、そう言った。

しょっちゅう貸してるから、郁も使い慣れているだろう。

正面に向き直るが、椅子には浅く座り腕を組んで下を向く。寝に入る体勢だ。聞き慣れた先生のナレーションは、『学校長挨拶、校長先生、お願いします』と言った。よし、いい感じで眠気誘発トークが始まるぞ。

一応郁の方を確認すると、既に曲に聞き入っていた。

再び正面を向き、郁のさっきの反応を思い出す。

茹でダコ…。

そんな単語がちょうど合ってる気がする。

それにしても、あんなに真っ赤になるなんてな、かわいい奴だ。腕もゆらゆらさせて、愛らしいったらありやしない。

ゆらゆら…。

そう言えば、朝も何度か転けそうになってたな…。しかも『儀式』なしで力を使うとはなんたる無謀さだろうか。

『儀式』…か。

思えば不思議だな…。

言葉の意味からしたら、『儀』性を以て『式』を為す、と言ったところなんだろうけど良く分らん。いつからか使えるようになっていたこの力だけど、郁の父…憲吾さん（と呼べと本人に言われている）が言うには、郁と同じ頃に使えるようになっていたらしい。初めは気づかず、無意識に使って倒れたことが多々あった。それで憲吾さんに話したら、『それは、神と天使が、強い想いを持った人だけに与えてくれる不思議な力なんだ。間違った使い方をすれば、有土君みたいに倒れたり、時には力自体を失ってしまう事もある。ひどい場合には死んでしまうこともあるんだ』と言った。そして『儀式』を教えてもらい、それから倒れることはなくなったのだが…。

『儀式』を行わないと体にちょっとした異変が起こる、という理屈が分からない。憲吾さんの話を全て信じるとすれば、神や天使のやることだし、とても人間では計り知れない理由があるのかもしれない。

…それに、何で憲吾さんは『儀式』のことを知っていたんだろう、と考えると、やはり俺が憲吾さんに教わったように、誰かに『儀式』を教わったとしか考えられない。まあ、それが誰から教わったかは別に気にもならないけど。

それにしても。

…強い想い、か…。

この力が使えるようになった原因は、分かっている。

…郁を、子供ながらに本気で守りたい、救いたいと思ったからだ。

そう、俺の顔の真横にいるこの郁を…って、真横!?

がたがたん!

一瞬どたついて、それでもすぐに状況を確認する。

人はまばらに散っている。もう始業式終わったのか。早…。

「ねー?」

「?何だ、郁」

「半目開けたまま思考に耽るの、有士の悪い癖だよ。何考えてたのかは知らないけどさあ」

「ジャイアントお世話」

「校長先生の話が短くて良かったよ。あれ以上長かったら、有士、絶対深みにはまってた。そんな顔してたよ」

「そーか。気にせんけどな。しかしあの校長の話が短いとはね…いつも30分以上はくだらなかったのにな」

「…もしかして有士、校長先生が替わったの、知らないの…?」

「何だ、校長替わったのか。今度の校長は生徒に人気が出るな」

「え?何で?」

「話の短い校長は生徒にとって楽でいい。教師たちにとってもな。それだけ」

「全くもう…はい、これ。ありがとね」

郁が、俺にウォークマン手渡す。

「ああ、どうだった？曲は」

受け取り、感想を聞く。

が、いい加減体育館にいる訳にもいかないので、さっさと教室に戻るべく歩き始めた。

「有土、私が持っていないほう買ったんだね。こっちも結構いいね」

「お前もしかして、バラードの方持ってるのか？」

「持ってるよー」

教室に向かう途中で、そう言った。

「んじゃあ帰りに取り行くわ。貸してくれ」

「別にいいけど…ニヤソ」

一瞬物騒な顔をした。

「や、別に今日じゃなくても後でいいんだ」

さっきの顔は何か企んでいる。そんな気がしてならない。

「いいよ」

「ホントか？」

「うん…ほっぺにちゅう1回で」

今度は俺が赤くなる番だった。

**あいたくなかった（前書き）**

いろんな意味で。



## あいたくなかった

教室に着くと、よく見覚えのある顔が2つ。1つは当然郁。もう一つは…。

多分幻覚だ。と言うより、幻覚であると信じた。

「言っとくけど幻覚や幽霊じゃないわよ」

「有、来るの遅いよ」

「郁、お前が逃げたから早めに来たつもりなんだが」

「有の『つもり』は当てにならないんだよ」

「失礼だな、チミは」

「ちよつと、何思いつきり無視くれてんの？」

「ん？ ああ、いたのか紫遥。全然気付かなかったぞ」

「まあ、しらじらしいこと…」

「で、何でこんなところにいるんだ？ 紫遥のクラスは向こうだろ？」

言って、窓から見える1年の校舎を指さす。

「しっつれいねえ。私馬鹿だけど知能指数は平均以上よ」

「自覚症状あったんだな」

「んなこと今は関係ないの。ざあんねえんだったわねえ。また一年よろしくう！」

「…」

こいつ、梁瀬紫遥<sup>やなせしほ</sup>。昔はこの近くに住んでいたらしいが、一度どこかに行ってしまったって、中学校入学の時にこっちに戻ってきたらしい。それから何故か、ずっと同じクラス。郁のあのことは知らないから、裏でいじくっているとも思えない。ま、ただの偶然だろうが。

「あ、『またこいつと同じクラスかよ、ま、ただの偶然だろうが』  
〜とか思ってるでしょ」

「人の心を勝手に読むな…」

「有が分かり易すぎるのよ」

「確かに」

「ちなみに、これって偶然じゃないわよ」

「…え？」

まさか、郁のあのこと知ってるのか？

「これは、そう、運命としか考えられないのよ！」

「どんなんだよ…」

「有士が私から逃げられない運命？一生笑いもの？下僕。時にパシリ」

「…そうかい…」

…よかった、こいつがアホで。

「あ、有士…」

「ん？何だ」

「あ、今日…」

がらがらがらっ！

教室の扉が開き、去年と同じ担任が入ってくる。

「先生来たから後で、な」

「うん」

下らない諸注意もそこそこに、先生はホームルームを終わらせた。

「はーい、行くわよ」

「っていきなり何処へだ!？」

思わず手の甲でツツコミを入れてしまった。

「カラオケよ。今からなら安く、長く歌えるし」

「残念だな、俺はこれから郁の家にCD借りに行くんだ。な、郁？」

「ん、そーだけど」

「んなもん帰りでもいーいじゃーんYO」

「∴その語尾ムカツクからやめろ」

虫酸が走るとはこのことか。

「そんなこと言っただって借りたCD半日聞き入ってることも無いでしよ」

「そんなこともないぞ」

実際昨日はその通りだった。

「またまたそんなこと言って。カラオケ行った帰りに行きゃいーじゃんYO!」

「だからやめろってそれ∴でもそれもそうだが。∴だがしかし給料日前なので金が少ない」

俺のバイト先は給料15日払いだから、ちょっと厳しい。

「気にしなーい」

「気にするわ馬鹿者」

「行こうよ、有。お金なら私が出したげるから」

「そうか?…まあ給料出たらちゃんと返すさ」

「おやおや、有土ってばヒモ候補生なんですか」

「馬鹿野郎、返すって言ったろ? しかもバイトしてんだからヒモとか言うな」

「似たようなもんよ」

けたけたと笑う。

「…ったく…、行くなら行くぞ。ほれ、ぼさっとするな、郁」  
「うん…」

覇気がない。まだ朝の疲れが残ってるのか?  
いつもならノリノリで来るのに…。

よし、こーゆー時は…。

「ほれ、元気出せ」

さわさわ。

「きゃっ!?!」

さわさわさわさわ。

「ちよっ…やめ、きゃははは!」

さわさわさわさわさわ。

「あははは…いい加減…あはは!…きゃーくっすぐったい」

弱点である首筋を攻めるのみ。

しかしこれは引き際をわきまえないと郁が慣れてきてしまうので、程々にしておく。

郁は、慣れると

「ブッチ殺す！」

そうそう、こういうふうにキレ：へ？

「まあ、その・・・なんだ。お前が気分暗かったみたいだったから明るくしてやろうと思ったんだが」

「：で？」

「：効果ばっちしみたいだな」

ニカツ☆と俺は笑ってみせる。

「ええそれはもう。素晴らしいわこのあふれんばかりのエネルギー」

魔王降臨なさいました。

「・・・やりすぎ。まずいんじゃないの？有士」

「巻き添え喰いたくないなら先に下駄箱んとこ行つてろ」

「わかってるわよ。私は天啓を得てないからね」

『天啓』とは、神によって力を与えられる事のことである。

全ての人間が天啓を得ることができるという訳ではない。

「そしてまっすぐ家へ帰れ」

「…待ってるわよ。ちゃんと連れてきなさいよ」

言って、教室を出ていった。

気が付けば、他のクラスメートもいない。  
ま、都合がいいと言えはいんだが。

「…まったくもう…どうして怒らせるかなあ…」

「や、引き際を誤ったもんで」

「待たせると悪いから、さっさと終わらせよっか…」

「…ああ」

果たし合いのような会話だが、実際のところは、郁が俺をお仕置きできるか、俺が郁のお仕置きから逃れられるかの勝負。

昔からこんな事をしているが、勝率は五分五分。

今いる状況を正確に把握し、どのように逃げ出すがポイントとなる。

現在は教室。抜け出して紫遥の元へ辿り着き、尚且つ郁の戦意を失わせるように巧いこと立ち回らなければならない。

どうしようか考えていると、郁が先に『儀式』を始めていた。

「アフに捧ぐ…ゲブラーにより、そなたを使役せん…」

なにい！？アフだとお！？初っ端から物騒なモン使うんじゃないかー！！

…モーゼを飲み込んだとされる死の天使、アフ。  
しかもそれをゲブラー…神の揺るぎない判断によって使役だとお？

…相当キレてんな、郁…。

だがこっちも自分の身がかわいいものですから、気合い入れて逃げさせてもらいます！

…こんなことに力使うのも、考えものだな。

神や天使はこの状況を見てどう思うだろう。

怒るのか。それとも、ただ笑って結末を見守るだけなのか。

…どっちにしても、今は逃げることを考えないとな…。

「サリエルに捧ぐ…ビナー、ホドにより、そなたを使役せん…」

すぐに、俺の横にサリエルが現れる。大天使や上級の天使は、こうして実体を顕せて力を貸してくれることが多い。

「何か凄いことになってますねえ」

「じゃなきゃ呼ばないって、常連さん」

「それもそうですねえ」

「…準備はいい？ちなみに、アフの力で別空間に転位する準備ができてから、教室の物壊さなくて済むね…」

「…ああ」

バシユウ！

途端に風景が変わる。

…と思いきや、依然教室に立ったままだった。

「別に転位する必要はないでしょう？物は壊れないように保護しておきました」

「さっすがサリエル！」

これで逃げ道はなんとか確保できた。

サリエルはにこっと笑って応えてくれた。

サリエルの言うとおりに、教室のあらゆる物が薄い膜のような物に覆われている。

ばっちり安全。

郁はと言えば、そんなことお構いなし、といった感じで構えている。

「…行くよ！」

郁の後ろで、黒い気体がうずめく。

そして、一気に俺を包むようにまとわりつき、俺の体が宙に浮いた。

「サリエル！」

「分かってますよ」

言っていると、風を巻き起こし、気体が俺の身体から離れていく。

「って、落ちる！？」

浮いてたんだから、当然か。

咄嗟に受け身を取るが、何かにぶつかる感覚も、痛い感覚も襲ってこない。



…まさか。

「…いやはや、早くも決着が付いたようですねえ…」

やっぱり？

郁は、俺が落下することを予測して、俺の落下地点に罠を張っていた。

おかげで、身動き一つとれない。

「申し訳ありませんねえ、お役に立てなくて」

絶対わざとやってるな、この笑顔の性悪天使……。

「いや、気にしなくていい…とゆーか、何気にあんたも楽しんでいるだろう？」

「なんのことですかねえ？」

「しらじらしいなあ…ってかどうしてくれるこの状況」

「それでは、私はもう還りますね。では…」

スウ、と消えていった。

「って、助けてっから行けー！」

直接脳に響く声が聞こえる。

「だってー、私じゃアフには対抗できませんよー」

「嘘言うな嘘を！あんた、『天使の運命を決定する天使』じゃなかったのかぁ！？アフなんて厄介なモンに対抗するには、俺はあんたしか喚べないんだぞ！」

どう対抗するの比如说、アフの運命をちょこっといじくって『俺に危害を与えることのできない運命』という強引な手段を使うはずだった。

「アフは私の友達ですから」

絶対嘘だ。

その言葉を最後に、すでにサリエルの気配は消えていて…。

「……………」

そして恐怖が始まった…。

## たぶん、一人を除いて楽園。

「ごめん紫遙く遅くなっちゃって」

「ん、ちよつと遅いけど強引に誘ってるから文句は言えないか」

あれから数分。

俺は郁の拷問を受けていた。

拷問と言うより、生き地獄。

今日のは激しかったな…くすぐりの刑。

「って有士、かなり疲れた顔してるねえ」

「あれだけされりゃ疲れるわい」

正直、今までで一番激しかったかもしれない。

例の気体に押さえつけられ、首筋から脇、足の裏までくすぐったがりの俺に総攻撃をかけてくるんだもんな。しかも、アフの一部を実体化させてくすぐりを手伝わせるという徹底ぶり…。まあ、殴られなかっただけマシだが…。

「じゃ、行こっか」

「うん。でも有士、大丈夫？」

「何とかな…」

「おっけいおっけい」

そう言って先に歩き出す。

俺たちはその後を追うように歩いていく。

何やら機嫌が良さそうだ。

「ノリノリだな」

「まあねー」

「休み中に行けなかったの？」

「行きまくりよ」

「じゃあ今日は無しで」

行ってもいいのだが、正直かったるい。

「またまたご冗談を。ホントは私の歌を聴きたいんですよ」

「お前のじゃない、歌手の歌だ」

やはりこいつは馬鹿に相違ない。

「どーでもいいのよーそんなものは。歌手は私が歌いやすい歌を出せばいいの」

「カラオケ好きの真理ね」

「そっかあ？」

馬鹿の言うことはよくわからん。

「着いたー！」

「早」

「学校から徒歩10分だもん」

あの後カラオケに対する熱い情熱を聞かされている間に着いてしまっていた。

俺は逃げ出すタイミングを失っていたようだ。

訂正、馬鹿であることを利用している頭の回るイヤな馬鹿だ。

「なに腑抜けた顔してんのよ。行くよ」

「お」

「店先で恥ずかしい事するなよ…」

俺の呟きも二人にかき消され、いざ、楽園へ…。

「イエー、ひゅーひゅー」

紫遥が歌い終わると、自分で自分に賛美を送っていた。

「アホか…」

紫遥と知り合ってから、何度と無く言ってきた言葉。

「有士も楽しまなきゃ駄目だよ」

「声少し囁らせながら言うな」

かれこれ3時間。俺は3曲しか歌ってない。もちろん、無理矢理歌わされた訳じゃない。紫遥と郁の曲を入れるペースが速くて、自分までなかなか回ってこないだけだ。

「別にいいんだけどな…」

「何が？」

「いや…何でもない」

「そう？」

曲が始まり、紫遥はちっさいステージへ移動した。

俺の番まで、5曲待ち…。はぁ…男がぐだぐだ言うモンじゃないけどな。切ないわ…。

「いやゝ歌った歌ったあー！」

「ほんと、紫遥歌いまくりだったね」

「クォーターだから血が活性化してるんだろう。しかしまあよく喉がおかしくならないな。腹筋割れてんじゃないのか？」

感心するばかりである。

それでいて歌も上手いから、才能なのだろうか。

プロより上手いんじゃないか？と思う。

ま、タフで歌が上手いなんてのは、ゴマンといるからな。  
才能の浪費、宝の持ち腐れ…。

「クォーターとか全然関係ないし…って、何憐れみの目で見てんのよ？」

「別に」

「何よ」

「んだよ」

「あははは…んじゃ、お開きにしようか」

もう夕暮れである。

4時間以上は歌ってたのだろうか。

「えー？もう？」

感づいた。

お腹空いてるからご飯でも食べに行こうよーとか言い出しそうだ。  
そうなると話に花が咲く（紫遥の独壇場になるが）。咲きまくるため、気象庁の方お願いします、開花宣言。

さすがに今日は疲れてるから、これ以上は勘弁してほしい。

「そうだな、今日はお開きだ。疲れた」

「むー、そっか。ま、こーんなぐだぐだの有士をかまうのも張り合  
い無いしね」

聞き分けがいいのか、悪態吐いてるのか微妙なところだ。

「有、CD取りに来るついでにご飯食べてく？」

「そもそも是非と」

「あらま、ほんとヒモみたい」

「…逝つとく？」

ウォークマンと今日配られたプリントしか入っていない鞆を、角を  
向けて思い切り振り上げる。

「いやん★えっちゅ」

「もう、二人とも…」

郁はさほど困った様子もなく言った。

「安心してよ、二人の恋路の邪魔はしないから。あれ？そういえば  
郁ってば愛妻料理というほどのもの作れたっけ？」

おちよくるように言い放った。

「何言ってる。な、郁」

「……………」

「っておい……」

両手を頬によせて赤くなっている。

郁には珍しいリアクションだな…って感心している場合ではない。

「郁はまんざらでもないみたいよ…ほれほれ、どうなのかな…ダ・ン・ナ・サ・マ…」

「アホか。行くぞ、郁。また明日な、紫遥」

「ばいばい、紫遥」

「んじゃ、程々にね…」

「何が!？」

「あはははは、じゃーあね…」

笑いながら、俺たちの帰り道とは反対方向に歩いていった。

「…紫遥の住んでるマンションって、私たちの家の方だね？」

「…ああ、途中まで道は同じ」

「…元気だね」

「…そうだな」

あいつ一人で元気の玉がいくつ作れるんだろう？

「とりあえず郁の家だな。CD借りに」

方向転換し、家の方へ歩き出す。

「だね。ご飯食べていくでしょ？」

「お前の手作りじゃなければな」

「む…ひどい…」

とは言うものの、簡単な料理しかできない郁には、俺を満足させる晩飯は到底作れないということはわかっているだろう。



「ひどいと言うなら少しは料理の勉強をしたらどうだ？」

「無理だよ、包丁でリングとかの皮むきできないよ」

「基本からちゃんとやれることが何事にも大切だ」

「だってー、やろうとしたら父さんも母さんも沙紀さんも『郁はいいよ』とか言ってやらせてくれないんだもん」

「そりゃあ…」

当然だろうな。郁が包丁持とうものなら、憲吾さんと郁の母親、里紗さんが（こちらも名前で呼べと言われている。なんだここん家の両親）止めに入るだろうし、もとより沙紀さんが厨房を譲るはずもない。

「そんなに料理がしたいなら、また家でやるか？」

「有士が作れるやつはもうマスターしてる」

そりゃそうだ。

特に難しい物を教えてきたわけではない。

誰にでもできる、簡単料理の数々。

世の中には、どんな料理も失敗する強者も多数存在するらしいが。

「ま、あきらめな」

「むうう」

「……………」

一応本気…なのか？

俺が教えた料理もそこそこできるみたいだし、もしかしたらそれなりの才能あるのかもしれない。

紫遥みたいに才能を埋もれさせるのももったいない。

どうしたものか…。

あ、そういえば。

「なあ、ホームルームの前に何か言おうとしてたよな、何だったんだ？」

「あ、別に大したことじゃないよ。ただ、ネクタイが少し曲がって、直してあげようとしたただけだから」

「…そっか？」

「うん」

「何か隠してそうだが…まいっか」

「（ふう、危ない危ない。暇なら二人でカラオケ行こうって言おうとしてただなんて言えないよ…）」

…ばっちり聞こえていた。

うーん、ういやつじやのう…。

## 侍従登場

そうこうしている間に、郁の家に着いていた。

横の郁を見れば、何故か悩み顔で唸っているが、一気にため息を吐いた。

何だ、まださっきの悩んでたのか。ま、ある程度はあきらめついたんだろ。そのうち誘ってやるか：今日は力も上手いこと働いてみたいだし、褒美として。

料理の方も、俺が何とかしてみるか…。

そんなことを考えていると、いつものように玄関のドアが開く。

「おかえりなさいませ、郁様」

「ただいま」

「あら、有土様。今日はどうなされたのですか？」

「郁にCD借りに。ついでに晩飯でもゴチになろうかと」

「まあ、ついででなんて。毎日でもよろしいのに」

「俺もそうしたいですけど、そういうわけにもいかないんで」

人として。

あまり甘えるのも良くないし。

「そうですか。今日は少し早めに晩ご飯御用意いたしましょうか？」

「や、いつもどおりでいいよ」

「私はお腹減ったからちよっと早めがいい」

甘えた声で郁が言う。

「では、用意ができましたらお呼びします。お部屋にお茶、お持ちしますか？」

「お願い」

「かしこまりました、少々お待ちくださいね」

ぱたぱたと、廊下の奥へ早歩いていく。

「行こっか」

「応」

郁の部屋に入ると、見慣れたテーブルの上に例のCDが。

「テキトーに座っというて」

「応」

着替えるために、郁は別の部屋に行った。

衣装部屋なんて、相変わらずすげえよなあ…。

言われたとおり、適当なところへ腰掛け、CDを手にする。

「これだ、早速聞くな」

ケースの中に入っていたCDを入れ、曲が始まるのを待つ。

すると、穏やかな曲調のピアノが流れ、部屋を支配する。

お…：同じ曲でもこれだけ違うのか。

コンコン。

部屋の扉が叩かれる。

「どうぞ」

自分の部屋でもないのにこう言うのも何か間違ってる気がする。  
しかし、勝手知りたる郁の部屋。

…これもまた何か違う気がするなあ。

「失礼します。あら、郁様は着替え中ですか？」

「そう。あ、そうだ沙紀さん」

「？」

「何かさ、郁の奴…本気で料理を学びたいみたいなんだよ」

「郁様が、ですか？」

少し怪訝そうな顔をして応えた。

「まあまあ、あいつ腕はそこまで悪くないと思うんだ。それは沙紀さんも知ってるでしょ？」

「ええ、まあ…」

かちやかちかと、カップを用意して中に紅茶を注いでいる。

一度、郁と沙紀さんが家に来たときに、郁の料理を食べたことがあった。

何かと不安そうな沙紀さんだったが、その時は特に何も言わず食べていた、と思う。

「あの時の郁の料理、まずかったかな？」

「いえ、そんなことはありませんが…」

「じゃあさ、あいつがやりたいって言ったら教えてやってくれないかな？ なんだか本気だと思う」

「……分かりました。それに、お嬢さんを迎える際にも必要なスキルだと思えますから」

微妙な笑顔で、沙紀さんはそう言った。

ってというか笑顔の質が、思いつきり俺を見て笑っているような気が…。

「お待た〜」

「待った待った、待ちすぎで耳から脳が垂れ落ちそれを思わず口から脳へ戻そうとする途中で間違って目から流出するところ局地的に豪雨な感じだったぞ」

「それでは、失礼いたします」

「紅茶ありがと〜、沙紀さん」

「いえ、ごゆっくり」

礼儀正しく部屋を出ていった。

流された、俺。

「あ、早速曲聞ってるんだ」

「気付くのが遅いつて」

さっきからかかっていただろうに。

「そだ、あとでCD貸してね」

「ん？」

「だから、別バージョンの方の」

「ああ、ちよい待て」

鞆をあさり、本体からディスクを取り出す。

「ほれ」

「さんきゅっ」

そのまま、沙紀さんの声がかかるまでマッタリとした時間が過ぎていった…。

階下の食堂には、俺では到底敵わないくらいきれいに盛りつけられた一般家庭料理が並んでいる。

「憲吾さんと里紗さんは？」

「今日は外出してますので、お戻りになるのは午後10時以降かと」

「あれ、兄さんもない」

「圭様はお友達と遊びに行っていると連絡がありました」

「そっか、残念」

あの3人もいれば楽しい晩飯になっただろうに。

「何、私じゃ役不足ってわけ？」

「なっ…そんなわけないだろ」

「何度も言うけど、分かり易すぎるのよん」

疲れている所為もあってか、あんまり突っかかってはこなかった。

「冷めてしまうので、早めにお召し上がりください」

「応」

「いただきます」

それぞれ席に着き、3人での夕食。

女二人に囲まれての食卓。

…うむ、悪くはない。

片方は性格に多少の難あり、だが。  
まあ、もう一人もよくわからんけどな…。

「…まーた何か失礼なこと考えてない？」

「滅相もございません」

「有土様って、案外尻に敷かれそうなタイプかもしれないですね」

くすくすと笑いながら、恐ろしいことを言った。

この人やはり難あるな。まあ、基本的にはかなりいい人なんだけど。

「何言ってるんすか」

「郁様にことあるごとに弱みを握られそうですもの」

「……………」

何を赤くなってるんでしよう、郁は。

またその恥じらう顔がかわいくてたまらない。

「あら、お二人ともまんざらでもないご様子」

ぼふうん！

俺と郁の頭から煙が出んばかりの効果音が聞こえそうだ。

「ういですわ、お二人とも」

何か楽しんでるなあ、沙紀さん。

そのまましばらく、何故か無言の食事が続いた。

郁は相変わらず頬を赤らめながら。

今日の郁、何かこんなんばかりだな…。

沙紀さんはそんな郁の様子を楽しげに観察しながら。



しかも郁がそれに気付いてないから、それが沙紀さんにとってまた面白いのかもしれない。いや、間違いなく楽しんでるな。

俺はと言えば、何とか平静を保ちつつあった。  
が…。

「…ねえ、沙紀さん」

「? どうかしましたか、郁様」

まだまだ笑顔のままの沙紀さんの表情が、なんだかとても子供っぽかった。

「私にさ、料理教えてくれない?」

「…」

郁は俺のことを分かり易すぎると言うが、俺からすればこういう言動をするのも分かっていたので、さほど驚くこともなかった。

しかし、沙紀さんは驚いたらしく、俺の方を見て目で訴えている。

冗談じゃなかったんですね、という表情。

少しの沈黙を経て、郁が口を開いた。

「ダメ…かな?」

「ダメ、ということもありませんが…」

旦那様と奥様が、と言いたいのだろう。

「ほら、言ったとおりでしょ、沙紀さん」

「言ったとおりって?」

「先ほどお茶をお持ちした際に、少しそういうお話をしていました

から」

「あ、私が着替えてる間に？」

「うむ」

ふと、沙紀さんの表情が変わった。

あ、さっきの楽しそうな笑顔だ。果たして何を言い出すやら…。

「郁様がやりたいというなら、私がお教えしますよ」

「本当！？」

がたっと立ち上がって、嬉しそうな顔をする。

「ただ、一つ教えていただきたいことが・・・」

「何？」

「何のためにお料理をしたいのですか？ 厨房を任される者として、聞いておきたいのです」

にへらへと笑い、そう言った。

「旦那様と奥様と圭様には、黙っておきますから」

井戸端会議でもするおばちゃんのような手振りで、そそのかす。

「そーいや、どうしてなんだ？」

どーせ俺に食べさせて、見返して服従させる！とか思ってるんだろ  
うけど。

「…有のため」

恥じらいながらそう言った。

ちょっと待て。

そこは闘争心を剥き出しにして俺にかかってくるところだろ？

「なぜ、有土様のためなのですか？もしかして、郁様は有土様のことを…」

「わー！わー！！わあー！！！！」

その先を遮るように大声を上げる。

誘導尋問っぽいな。沙紀さん、いい性格してるよ。

「…そうだよ、有のこと好きだからだよ」

「…なんですか？」

告白っつーのはもっと雰囲気を出さないといかんですよ？

いや、素直に嬉しいと言えば嬉しいんですけど。

「それで、有土様は郁様のことをどう思ってたっしやるのですか？」

目が輝いている。

怖っっっ！

いや、だから告白っつーもんはもっところ…。

## 賑やかな夜、一人の夜

ある日、学校の帰り道。

夕日が傾きかけた、暖かい日差しの中。  
今、一人の少女と対面している。

「…有士君」

「…なんだ？ 郁…」

「私、今までの関係のままじゃ、もう、耐えられないよ…」  
「？ 一体なんのこ…」

軽い、触れるだけのキス。

「私、有士君のことが、好き…ずっと、子供の頃から、好きだったの…」

「……………知ってたよ」

「…え？」

「知ってたよ、ずっとな。…それに、俺も郁のこと、ずっと…好きなんだよ」

「…有士君…私、すごくうれしいよ…有士君が、私のこと好きって言うてくれて…」

「郁…」

夕日の中、伸びた二人の陰が、もう一度重なった…。

…ってゆーのがロマンスだろお？ それとも俺、おかしいのか？ いやいや、これくらい夢見てもいいだろ！？

「どうなんですかあ？」

うりうり、と俺の腕を人差し指でつつく。

この人、こんなキャラだったわけ…？

郁は郁で、俺の返事を待ってるようにも見える。

覚悟するしかないのか…？

好き

嫌いじゃない

っていうかこんなんばっかだ…。

ま、答えるとするならば…

「…俺も好きだけど…」

負けた。

沙紀さんの眼差しに。

「まあまあ、そうですか！それならば、今日から早速、是非とも郁様にお教えしませんと」

「はっ…？今日から？っていうか今大事なのは料理とかでなく…」

「当然今日からです。お料理は下準備も大事ですからね、明日の朝食の仕込みから始めましょう」

「ええっ!？」

聞いてないし。

やっぱしそーゆー展開になるのね…。

「では有士様、明日の朝食もご一緒できますか？」  
「え、あ、はい…」

沙紀さんの勢いに押されて、答えてしまった。

しかし…。

「それはそれで、朝起きるの辛いな…」

「その心配はないぞ、有士君！」

「えっ！！？？」

「話は全て聞かせてもらったー（棒読み）」

「兄さん！？」

「聞くともなしに聞いたぞー！」

「憲吾さん！？」

「あなた、それは盗み聞きです」

「む、そうか？」

「奥様まで！お帰りが早いのでは…」

「たまたま早く終わったのよ」

「何てベタな…」

「何か言ったかい？有士君」

「いえ、何も…」

もう突っ込まない・・・。

「それで、式の日取りなんだが…」

「「何の式！？」」

いきなり突っ込んでしまったよ、はあ…。

「もちろん、二人の結婚式に決まってるじゃない。ね、あなた」  
「当然」

「年齢的にまだ無理ですって」

まだ16歳だしな。

…あれ？何か・・・年齢の問題じゃないんじゃないか・・・？  
…ま、気にしないでおこう。

それとも突っ込みどころを間違ったのか…？

都合良く理解するなら、18になったら結婚してもいいって事？や、  
ちよつと早すぎ…。

「何を言うんだね。ついこの間17歳になったばかりだろう」

「…そうでしたっけ？」

「…プレゼントあげたはずだよ？…忘れてるね」

は？

待て、今日は7日の始業式で、俺の誕生日は4月3日だから…。  
あ、もう四日ほど過ぎてる。

「おまえ自分自身に対する関心低すぎ」

「そんなひどくないよ…」

「しかも粘着気質破瓜型」

「それは絶対違う！」

「…お？」

「何はともあれ、あと一年経てば18歳、晴れて結婚ね」

「まだ高校生だよ」

「お二人のことを考えると、最速でも結婚まで高校卒業するまでの、2年は掛かりますね」

「むう…」

何やら考えているようだ。

ぺっかーん！

憲吾さんは何かひらめいたようだ。

「有土君」

「・・・はい」

「先程私が言ったこと覚えているかい？」

「…聞くともなしに、ですか？」

「その前。心配はいらないと言ったことだ」

「…ああ、あれですか」

なにしろいきなりだったから、良く覚えている。

「あれが、何か？」

「いやなに、始めは朝に迎えを出して、郁の作った朝食を食べてから学校へ行けば、と思っていたよ。だが二人がいずれ結ばれるのなら、別の手を考えなくもない」

…まさかな。

「ははは、有土君なら安心だろう。な、母さん」

「ええ、何の問題ありません、ふふ」



二人して笑っている。

その横では、圭君も楽しげに俺たちを見ている。

二人の言いたいことに気付いたのか、沙紀さんも微笑んでいる。

郁は、突然のことで頭が混乱しているようだ。

「同じ家に住んでいれば、朝起きてすぐに郁の作った朝食を食べられるだろう？」

やっぱしそう来ましたか。

「今日から宜しく、マイブラザー」

「その言い方は勘弁……」

「ご両親には私から言っておくわね」

「亨も様子さんも、喜んでくれるだろう」

……亨と様子とは、俺の両親の名である。

「これで、我が咲倉紀家も安泰だ」

「じゃ、俺はやりたいようにやっても構わないんだ？」

「そう言うな、圭。もちろん、お前も嫁をもらって、私たちに孫の顔を見せてくれ」

「はいはい」

「旦那様、少々話が脱線してます」

「む、そうだな、ふざけすぎたか。……で、有土君」

ふざけてる自覚があったのか……!?

「……はい？」

「真面目な話、家に婿として来てくれないかい？ 君なら家のことを良く知っているし、一人の父親としても、郁をもらってほしい」

「私からもお願いするわ。有士君、どうか郁をもらってくれないかしら」

「それに何より、私も有士君のことをかなり気に入ってるからね」  
「…」

この話題になって、しかも3人が出てきた時点で、ややこしくなりそうな感じはしていた。

無論こんな展開になるとは思いつかなかったが。

普通はこーゆーときは悩むものだが…。

「郁がいいと言えば、俺はいいですよ」

冷静に、自然とそう口から出ていた。

実際迷うことはなかった。

昔から郁のことを好きだったし、あのことがあってからも、もちろんその前から郁をずっと好きだった。

そして、この家の暖かさも好きだ。

俺にも両親はいるけど、ガキの頃から仕事ばかりでかまってもらうことが少なかったから……。憲吾さんと里紗さんの方が、遊んでもらったことが多かったな。

「で、郁はどうなん？」

「…え？」

さっきからずっと話を聞きながらぼくとしていたが、圭君に呼ば

れて正気に戻ったようだ。

「んと…有士がいいなら、私もそれでいい…」

うつ…!!????

かっ…かわいい!!

そのもじもじしながら恥じらう表情が、とても素晴らしい!!

「ブラボー!!」

「宴じゃ…宴の準備じゃ…」

「「「…は?」」」

あの、キャラ相当壊れてますけど。

「と、とりあえず止めないと」

「宴って言っても、俺たちは明日学校あるし、それに酒とかそーゆーのは…」

「む、そうか…?」

「つーか。酒、無理だし」

「うむ…」

お、変なところで物分かりがいいな。

「（チッ…）仕方ないわね…」

なぜ悔しがるんです?

「宴会用の材料もそれほどありませんし…」

あったらやってるのか？

「で、有士君の部屋なんだが…」

「ってちよっと待ってくださいよ!？」

「何だい？」

「確かに郁を嫁に・・・ってか俺が婿に・・・って言いましたけど、一緒に住むなんて…」

「あら、さっき婿に来てくれるって言ってたでしょ？自分で」

待て待て待て。

「まさか明日からとか言わないでしょうね!？」

「そのつもりだが？一緒に住めば郁の作った朝食が食べれる、と言って、有士君もそれでいいと言ったはずだが」

「…え？」

言ったような、言っていないような。あれえ？なんかおかしいな…この雰囲気。

…でも。

一人で家にいて、俺が寝る頃に親が帰ってきてガタゴトうるさくて、安眠できない…ってのよりは、ここに住まわせてもらった方が、もしかしたらいいのかもしれない。

忙しいだけの親に、俺という負担を減らしてあげたいのも事実だし…。

母は、仕事に行く前に必ず朝食を用意してくれる。

父は、自分の仕事に誇りを持ち責任を背負っていると、子供の頃から聞いている。

俺はまだ高校生で、子供だから、親のために夜食作って置いておくくらいしかできてない。

親のためにできることなんて、まだまだ少ない。

大人になったら、俺が親に自由な時間を与えられるようになりたい。だから、俺は咲倉紀家で、憲吾さんに学ぶことは多いはずだ。

ただ、なかなか一人の時間はもらえなさそうだな。一人の時間は好きだし。

一人になりたくなったら、沙紀さんに頼んで人払いしてもらえばいいだろうし。

それでもし自分の家がいいと思ったら、そう言えいいだけのことだしな。

…多分帰してくれそうにはないけど。

というか、拒否権なんか最初からなさそうだ。

なんか、考えるのが馬鹿らしくなってきた・・・。

「有土…?」

「何だ、郁?」

「私、一生懸命料理作るから、食べてくれる?」

「え? ああ、いいとも」

はたしてちゃんと作れるかどうかは疑問だが。

「大丈夫ですよ、私の手伝いから始めてもらいますから」  
「えー?」

「何事も下積みが大事です。ですよ、旦那様」

「もちろんだとも」

「私も、お母様から授かったお料理の味を、ついに郁に伝えることができるわね」

お母様、とは郁のばあちゃんだろう。

今はもうお亡くなりになっているが、昔はよく手作りの和菓子をよくいただいたものだったなあ…。郁がああのレベルに達するにはあと40年はかかるか…。うむ、里紗さんに頼んだほうが早そうだ。

「むう、そゆことなら仕方ないか…」

頭では分かっているようだが、気持ちでは納得行かないご様子。

「ま、何事も経験。下積みも必要だ。やって得することはあっても、損をすることは無いと思うぞ」

「ん、有がそう言うなら…」

こうして突然…いやたぶん憲吾さんの中ではすでに計画済みであったであろう、

俺の婿入りが決定したのだった。

「っはあ…」

とりあえず荷物まとめに家に帰りますと適当に言い、自宅の部屋に戻ってきた。

制服のままベッドに横たわる。

郁から借りたCDを流し、落ち着いたメロディーの中で、今日はなんか色々あったなあ、と考えていた。

明日から郁の家、か。

荷物、明日にでも運ぶか…。

あー、ばれたら面倒そうだな…。

学校の奴にどう説明したもんかなあ。お互い告白しあったなんて知れたら

『なんか不思議でクールで何事にも無関心だけど（人はそれを無愛想という）、たまに見せる優しさが漢を感じさせる、いいヤツ（人はそれを意外性の男という）』というふうに築きあげてきた俺のキャラクターが、一気に崩れてしまいそうな気がする（自己陶醉）。

特に、紫遥。あいつに知られるのは時間の問題だ。郁が口滑らせてしまいそうだし、紫遥も咲倉紀家には遊びに行くことがあるから、沙紀さんも

「おかえりなさいませ、有士様」

とか言っつきそうだし。

いざとなれば力を使ってでも奴をリングに沈めて…！

まあ・・・真面目な話だしちゃんと話せばわかってくれそうだが。その前にちゃんと話を聞いてもらえるかが不安なところだ…。

そーいや朝は迎えが来るのかな。一応目覚ましかけておくか。

朝、か。まさか今朝、遅刻しそうになるなんて思いもなかった。

自慢じゃないが今のところ無遅刻無欠席無早退だからな、下手に遅刻はしたくなかったから『ルヒエル』の力を借りたんだが…。

ルヒエル：風を自由に操ることができるといわれる、天使。

彼の力は、恐らく今までで一番世話になってきたなあ…。

あの風に乗る感覚、好きなんだよな…：なんか気持ちよくて。相性いいのかな、ルヒエルとは。

…そろそろ眠くなってきたな。風呂入って寝よ…



あと10秒遅かったら話が終わっていた。

…。

…何かの予感。

目が覚めてしまった。

時計を見れば、まだ6時30分。

なんだ、あと1時間は寝られたじゃないか。

ぼけーとしながら、カーテンを開けて外を確認しようとすると、突然俺の部屋の扉が開いた。

「あら、起きてらっしゃいましたか」

「…」

「(チツ)」

「…?」

「おはようございます、有土様」

「…おはよう、沙紀さん」

そうか…昨日のことは夢じゃなかったんだなあ…。  
本当に起こしにこさせるとは。

「…で」

「で?」

「その小脇に抱えているのは何? 沙紀さん…」

「これですか? 見ての通りですよ」

そう言って見せたのは、持ち運びのできる小さなサイズの黒板。

「有土様が起きそうになかったら、これを使えと郁様に持たされまして…」

「…引っ掻く音、かなり嫌いなんだけど…」

「いえ、音で起こすのではなくて、こう」

持ち上げると、鋭い角を向けてきた。

「いや、さすがに…」

目覚めは返り血まみれのメイド。

…ってゆーか俺、瀕死じゃん？

「…恐怖でがつつり目が覚めたよ…」

「それでしたら、制服にお着替えください。準備ができましたら、

玄関先に車を止めてあるので屋敷に参りましょう」

「おーらい…」

俺の返事を聞くと、沙紀さんは部屋から出ていった。

…俺は無事生きている。よかった…。

「とりあえず、顔洗おうかな…」

顔を洗って歯を磨き、寝癖を直し、着替えて準備完了。

さて、行くか…。

玄関を出て、鍵を閉める。

あれ…？両親は仕事や出張やらで鍵は毎日きっちり持って行ってる

し、一つは俺がしっかり管理してる…。

どうやって入ってきたんだ？昨日の夜に鍵かけ忘れたかな…。  
振り向いて、置いてある車を見る。  
セルジオ…。初めて乗るな…。

「早いですね」

「男はそんなに時間掛からないッス」

「よろしいことです。が…」

ふわ、といい香りがした。

すごく、いい香り。

何の香水使ってるんだろうな…。  
目の前に、沙紀さんの頭がある。

「ネクタイぐらい、きちんと締めてください」

首元が、こそばゆい。

「はい、できましたよ。車に乗ってください」

そう言って、後部座席のドアを開ける。

言われるがままに、俺は車に乗り込んだ。

あれ？運転席に誰もいない…と言うことは、沙紀さんが運転するの  
か。

意外だな…しかもメイド服でか。

「それでは、行きますね」

「うん」

ふう、と背もたれに体重を預ける。  
な、なんだこの素敵な感触はあー！！

つかれなさそうな乗り心地…それでいてもっちりとしてもふやかな  
素敵な世界（↑意味不明）を朝から味わえるとは…！

「到着です」

「早え！」

「だって、近所じゃないですか」

「…それもそうか」

歩いても10分掛からないから、当然か。

ああ、もうちょっとあの感触を味わっていたかった…。

「おお、やつと来たか」

「おはよう、有土君」

「おはようございます、憲吾さん、里紗さん」

「朝食の準備はできています。食堂に行きましょう」

「…お待たせしてしまっただけですね」

「何、気にすることはないさ」

「あ、おはよう有」

「ふあ…おう、ブラザー」

「やめてくれ。圭君ずいぶん眠そう」

「毎朝こんなもんだよ」

「夜更かし？」

「いや、昨日の疲れが残ってるだけだ」

「…なにやってんだか」

俺が帰った後に何があったかは、敢えて聞くまい。

「有、ご飯どれくらい食べる？」

「そんな多くなくていいぞ。俺の朝の元気の元は主にみそ汁だからな」

「そーいやそーだっけ。でも、他のも食べてよね」

「応」

「おお・・・母さん、私たちは郁の料理を食べるの初めてだな」

「ええ・・・。厨房で手伝っていましたが、心配することは何もなかったわね」

二人は感動している。

「たるい…眠い…」

義理の兄はマイペースだった。

全ての準備が終わると、

「いただきます」

「「「いただきます」」「」」

…非常に礼儀正しく朝食が始まった。

俺の朝は、毎日みそ汁から始まっていた。

じじむさいと言われようとも気にしない。

母が作ってくれておいたものを温め、自分好みに濃さを変えるほどだ。

そして、この家の食卓、俺の目の前にもみそ汁が厳かに鎮座していた。

「このみそ汁は、誰が？」

「私と郁ですよ。味噌は我家伝統のものです。お気に召すといいのですけど」

「がんばったよぉ」

ここで飯を食ったことは多々あるが、朝食は初めてで、みそ汁が出るのも初めてだった。

お椀を持つ。

程良い温度で、暖かさが伝わってくる。

見た目。

：かなりいい。豆腐とネギの、具としての絶妙なバランス。

色からすると、味噌は赤味噌7、白味噌3といったバランスだろうか。（↑不正解）

香り。

鼻から軽く香りを入れると、口の中に唾液が発生する。

これは、かなり期待できそうだ（↑自称若きみそ汁王）。

そして、ついに味。

一口入れ、全ての神経を、味を確かめるために集中する。  
…。

「どう？」

「お口に合いますか？」

「…」

口の中に広がる芳醇な味わい…。

「美味しいな…」

普通に美味しい。

「…ふう、良かったあ〜」

こうして、この家での（なにげに）初めての朝食は過ぎていった。

昨日とはうって変わった朝の風景。

二人に待たされるどころか、3人で一緒に行く。

「で、有士は今日から家に住むことになるからな」

登校中、いきなり言われた。

「今日からって…荷物も運ばなきゃいけないのに今日からは無理じゃない？」

「学校終わってすぐ始めれば大丈夫だよ」

「…そんなもんか？」

「そんなもんだろ」

引越しになるわけだから、そう簡単には終わらないだろう…？

「ああ、それと有士」

「何？」

「今日から俺のことは敬意を込めて『お兄様☆』と呼ぶがいい」

「はぁ・・・」

「お前は特別だ。俺はあと11人妹をつくるのだ」

「何に影響されてるの・・・」

確かに。いつも『圭君』て呼んでたから、いきなり変えるのも…って。

「それじゃ周りの奴らが混乱するんじゃない？」

というよりもむしろ、この年で婿入りであるということがあんまりにも知れ渡ると、困る。

俺が作り上げてきた『不思議でクールで何事にも無関心だけど、たまに見せる優しさが漢を感じさせるいいヤツ（そう思っているのは自分だけ）』というキャラが崩れてしまう。

「冗談だ、俺だって呼ばれたくない」

「お兄様☆なんて、有には似合わないよ」

「今まで通りの呼び方が慣れてるから、このままでいいじゃんオ・

ニ・イ・サ・マ」

「は、やめろ…」

「ホント似合わないね」

「だろうな」

「と、鳥肌が…」

…大していつもと変わらない雰囲気。変わったのは話の内容だけだった。

教室に入ると、あれがいた。

「おはよ」

「おはようさん」

「おはよ」

「あれ、郁ってばごきげんだね」

「そう？」



端から見ても機嫌がいいみたいである。  
ま、朝から自分の料理がほめられて、嬉しいだけなのかも知れないが。

…とは言え、ほとんど手伝いだけみたいだったが。

「何かあった？」

「ううん、別に何もないよ？」

「…そう？」

紫遥は、大して気に留めることもなく窓際の後ろの席へと戻っていた。

「有土、黒板みといったほうがいいよー」

紫遥から声がかかる。

黒板？

【席は、登校した順に各自好きなところを確保するように。中間試験終了後まで席替えは行わないから、早い者勝ちだ。視力の悪い者は、前から2列目までに自主的に座ること】

…相変わらず適当な担任だ。

## 変わることに変わらないこと

新しいクラス、新しい学年ということもあって、今日も昼前に学校は終わった。

軽い自己紹介、委員会やクラスの係りの配属を決める。定番のことしかしなかった。

ただ、定番じゃないのは

「……………すー」

担任が居眠りしていることだった。

「おい伊勢亀、全部終わったぞ」

「…んあ？」

「あんま委員長泣かすなよ…」

「…ああ、わかった」

……………すかー。

スパコッ。

「…山階。喧嘩売ってんのか」

「それはこっちの台詞だったの。もう全部終わったんだから、書類持って職員室戻れ」

ほれ、と教卓の上を指さしてやる。

「ああ…全く、ゆっくり寝かせてくれ」

「いいから仕事しろ！」

「へいへい…あと、杏子先生と呼べとずっと言ってるだろう」

「それじゃ起きないから名字で読んでるんだろ！」

仕方ない、とばかりに立ち上がり、クラスの役職表と委員会表を持ち教室を出ていった。

ダメな教師だ…。

担任・伊勢亀杏子。

なぜあんなのが教師で、しかも担任まで持てるのだろうか。

まあいい、委員長に頼まれた（というより押しつけられた）仕事は終わった。  
帰ろう…。

「有、いつもお疲れさま」

「あの亀、いつか更正させてやる」

「まあまあ…そだ、委員会一緒だね」

「ああ」

どうでもいいことまで郁と一緒にというのも、何か恥ずかしい。

しかも体育祭実行委員。

…前期でやる企画会議以外、9月まで仕事無いんじゃないか？しかも体育祭の残務までもが終わったら仕事なくなるじゃん。くそ、去年の内に気付いていれば去年も体育祭実行委員に立候補していただろうに…。

「じゃ、帰って引越しの手伝いするね」

「悪いな」

「ん、平気だよ」

「…」

しまった、と思ったときには、もう遅かった。

「あれ、有士ってば引越するんだ」

「し、はる……」

「何よそのリアクションは」

「あ…」

郁もマズイ、と思ったらしい。

せめて、学校出てからの会話にしておけばいいと、後悔した。

「一人暮らし始めんの？ あんた家に不自由してないじゃない」

「まあ、そうだが…」

どう逃げるか考えていると、

「私ヒマだし、手伝ってあげよっか？」

「いいっ!？」

「えっ!？」

それはいかん。非常にいかん。

「なーに遠慮しない遠慮しない!」

「いや、悪いからいいぞ？」

「そ、そうそう。それより部活は今日は無いの？」

「みんなは新入部員の勧誘。私は明日が当番だから、今日は平気。」  
気にすることないわよ、ほれ、有

士の家にれつつらごー」

と言って、さっさと行ってしまおう。

普段はそんなことしないのに、何で今日に限って…。

いや、厚意はありがたいんだが…ありがた迷惑って、こういう事言うんだな。

「(ね、有…)」

「(何だ、郁…?)」

「(紫遥には、言っておいた方がいいんじゃない?)」

「(後でばれるより、いっそ潔く、か…?)」

「(うん…それに親友だし、話しておきたいってのもあるよ)」

紫遥は俺たちの先を歩いていて、俺たちのひそひそ話は聞こえていないようである。

しかしなあ…。

紫遥は、このことを聞いて素直に理解してくれるだろうか。それとも…。

「(紫遥も有士も、もう昔のことは振り切れてるんでしょ)」

「(…そうだな)」

昔のこと。

中学3年の時だったか。

俺は、紫遥と付き合っていたことがある。

紫遥に好きだと告白されたのだ。

郁のこともあったが、紫遥のことも嫌いじゃない、と言うよりも割

と普段から付き合いが多かったから、自然の流れといえはそれだけなんだが。

紫遥の告白に、『俺がお前のことを本当に好きになれるかはわからないけど、それでもいいのなら』と答え、付き合うことになったのだが。

俺はめんどくさがりの部類に入っているため、学校や学校帰りと一緒にいることはあっても、家に帰ってからや休みの日は俺からは連絡することがなかった。

いつも、紫遥のほうからの出かける誘いやらだった。恋人同士というより、性別を越えた親友といった方がしっくりきていたかもしれない。

そんな俺に愛想尽かしたのか呆れたのか知らないが、半年もたずに別れた。

それでもお互いのことは嫌じゃないから、昨日みたいに遊びに行ったり、今みたいに『ヒマなときに一緒に遊ぶ人』の上位には入っている。

そんなことがあったのは郁も知っていて、どうやらそのことを心配しているようだ。

「（大丈夫だと思うが、くれぐれも口外しないように言わないと後が大変になりそうだから、言葉は選べよ）」

「（ん、わかった）」

とてとてと、郁は紫遥の横に並ぶ。  
俺はその後ろで見守ることにした。

「?どうしたの、郁」

「あのね、真面目な話だからちゃんと聞いてほしいんだけど…」

「真面目な話? 宇宙人が突然やってきて地球侵略を始めて、そして私はその宇宙人たちに拉致られていやーんキャトラれ〜みたいな? やっぱり私の美しさは宇宙人をも虜にしてしまうのね〜!!」

「…アホ」

後ろでツツコミを入れてしまった。

「何か言った?」

眩き程度だったのだが、聞こえてしまったらしい。

「いーえ、別に」

「それって真面目じゃないよ〜」

とほー、と肩を落として言った。

「じゃあじゃあ、突然大一個部隊に囲まれたと思ったら実は『紫遙様はイギリス王室の正当な王位継承者です』って迎えに来た無敵艦隊だったari!?! いやーん私ってば一気に女王デビュー!?! 世界の注目の的ー!?!」

身振り手振りを添えて、そんなこと言うか? フツー…。

「思いつきり日本人、英王家はまだ続してる…」

「無敵艦隊はスペインだよ〜」

がくん、と肩を落として言った。

ふたりじゃツツコミが追いつかないなあ…。

「と、とにかくちゃんと聞いて」

「でも、もう有土の家着いたから、引越し作業しながらでもいいよね？」

「あ、うん」

くだらないボケを紫遥がかましてる間に、家に着いてしまった。  
ま、いいか…。

玄関の鍵を開けて、いざ部屋へ。

さて、結構荷物あるから、大変だ。昨日の内に少し片づけておけば良かった、と考えながら自室の扉を開ける。

「ありゃ？」

「あれー、何にもないじゃん。業者にでも頼んだの？」

「いや、そんなはずは…」

…部屋のもの全部盗まれたってか？

「あら、有土様おかえりなさいませ」

「さ、沙紀さん！？何でいるんですか！？」

「あら、郁様、それに紫遥様ではないですか。どうなされたのです？」

三人して状況を飲み込めないでいる。

それに気付いたのか気付いてないのか、沙紀さんが口を開いた。

「あ、有土様の部屋にあった荷物は全て屋敷へ運ばさせていただきました。お手を煩わすこともないと思いましたが…」



「あ、ああ、それに関しては問題ないんだけど…」

疑惑の視線が、一つ。

「…どーゆーこと??」

こっちに多少の問題あり。

頭上に『?』マークを飛ばさん勢いで、見事に混乱している。

「さっき話そうとしてたことだよ。紫遥ってば話を変な方向に持っていくから、言えなかったんだよ」

うーんと、どこぞの探偵のような仕草で今の状況を理解しようとしている。

「…とりあえず、座って話を聞きますか」

梁瀬探偵、ギブアップ。

「私は邪魔なようですので、お先に屋敷に戻っていますね。あと、お昼ご飯の用意はしておきますか?」

「うん、お願い。おつかれさま沙紀さん」

一礼して、俺たちの元から離れていった。

沙紀さんが帰ってから、とんでもないことに気付いた。

ベッドの下にあったエ紹本、見られてるよな…。捨てられてるよな…。

何も無い部屋に全員で座り、昨日からの事のあらましを説明した。

「はー、そゆことね」

あまりにも突飛なことでも多少の同様はしているようだが、その台詞に、このことを咎めるような意味は含まれてはいないようだ。

「ま、私からはおめでとう、だね」

「紫遥…」

「大丈夫、有士とのことはいい思い出…ばかりじゃないか」  
「をい」

「だけど、今はもう特別な感情なんて無いから安心していいよ。それに、わざわざ二人の中を掻き乱すような真似もしたくないしね。二人とも、私の大事な親友だから…」

いい笑顔で、そう言ってくれた。

「でも、二人でいゃんばかんやってないで、私の事もちゃんとかまってちょうだいよね！」

茶目っ気たっぷりに、そう付け加えて。

「もちろんだよ、今まで通りで変わらないよね？」

「当然」

「ってゆーか、あまりにも態度変えたりしたらその方が嫌だしね。はあ、しかし同棲を越えて婿入りねえ…これでますますヒモ道を开拓する事になる有士でした、マル、と」

「お前ってそればかりな…」

悪態吐かれたようだが、いつもと変わらないノリに安心した。

「だって、婿入りでしょー？それじゃそう思われても仕方ないんじゃない？」

「んー、世間一般ではそうなのかな？」

地方の権力者の家に生まれた郁には、ちよい分からないところなのかな。

それでも家以外では俺たちとほぼ同じ空間で生活してきているわけだし、単純に分らないだけかも知れない。

「俺にはよくわからん」

「ドラマとかだと大体そうでしょ」

「何のドラマだよ」

「さあ？」

？ってなんだよ…。

「へえ…」

「こらこら、郁…。はぁ…俺は良く分からないが、そちらの方々は環境が大いに違うと思うのだが…？」

「そお？」

わざと言ってやがる、こいつ…。

俺は立ち上がり、尻を叩いて埃を落とす。

だが掃除もされているようで、汚れてはいないようだ。

「腹減ったな、何か食いに行くか」

ぐいーっと身体を伸ばしながら、二人に意見を求めた。

ぐきぐきつと、腰や背筋が鳴る。

別にこの部屋じゃなくても、リビングで話せば良かったかな…身体痛くなる事もなかったし。

「沙紀さんが用意しておいてくれるってさっき言ってたから、家で食べようよ。紫遥も一緒に」

「行くよーもちろん。沙紀さんの料理おいしいからね。あ、でもらぶらぶなお二人の邪魔になるかしらん♪」

「態度をあまり変えるなって言ったのはお前だろ。何を遠慮する必要がある」

「…何も普通のツツコミをする事もないでしょうに。もしかしくても照れ隠しかしら〜♪」

…しっかりばれてしまった。

横では、『らぶらぶ』という言葉に反応したのか、郁が赤くなっている。

この手の話題には強いはずなのに、いざ自分の番となるとすっかり弱くなってしまう、というパターンか。

…実にいい。

「ほんじゃあ咲倉紀家へれつつらご〜」

## 新しい場所・彼の記憶・有士

その後、紫遥はいつもどおりのままで、俺たちはホッとしていた。

昼食も終わり、紫遥は用事があるからと帰っていった。

そして俺は沙紀さんに連れられて、でかい扉の前に立たされている。

「こちらが有士様のお部屋になります。それから旦那様から、今まで通りの郁様の身の回りのお世話に、これからは有士様の身の回りのお世話も仰せつかりましたので、何かありましたらお申し付けください」

「はあ…どうも」

何度も見た事のある、この家のどこにでもある扉だが、その先の一つが自分の部屋になるなんて…一昨日までの自分が知ったら卒倒モノだな。

…ん？

ということは、あれか？

「つてことは、俺と郁が沙紀さんの『ご主人様』…？」

「その通りです」

にっこり、と答えた。

アメリカンドリーム…いや、アメリカンが萌えるかは分からん。

電気街男児の夢、叶う。

…何考えてんだろうな、俺。

「どうぞ」

扉が開かれ、中へと導かれる。

おお、これぞまさに俺の部屋。

窓の位置が少し違うくらいで、華やかすぎず、かといって質素すぎず、生活感のあふれた部屋になっている。

「前の俺の部屋と全く同じ配置にしてあるんですね」

「物と物の間は広がってますけどね」

言うとおりに、ベッドのすぐ脇に置いてあったテーブルが、ベッドから1メートル程離れたところに置かれていた。

クローゼットも確認すると、服の並びも変わってないうえに、きれいに折りたたまれている。

「ちょっと置き場所に無理がありましたか？」

「そんなことないよ。むしろ綺麗になって助かったよ。それより、午前中に全部終わらせるなんて凄い」

「プロですから」

果たして何のプロかは分かんが、業者をやたら呼んでやらせなければ無理ってものだ。

「力使えば簡単ですよ。さすがに一人では荷物は運べませんでしたけど」

「え？ 沙紀さん天啓得てたんですか？」

力を使っているところを見た事無いから、驚いた。

「メファシエルの力で、この部屋の壁と有土様の部屋の壁を、扉一つで行き来できるようにしましたから」

納得。

メファシエル、扉を開く者の意。盗賊の守護天使とされる彼の力を使えばそれも簡単だな。玄関が開いてなかったのに家の中にいたのは、そういうことか。んで、あとは他の数人のメイドや憲吾さんのお付きの黒服軍団に重い物は運ばせた…ってどこか？

でも、どこでも●アみたいだ。メファシエルの力って…いい。今度世話になろうかな…。

「ところで、何であの時まだ家にいたんですか？」

3人で驚いたときの事を聞いてみる。

「何か忘れてたりしたらいけませんので、日常生活に必要であると思われるものを確認して回っていたんです。新しい物でもいいんですが、使い慣れた物の方がいいでしょうから」

ほう、さすがメイド服を着ているだけの事はある。

細かい気配りもしっかりできている。

「そこまでさせると何か悪いですね」

「いえいえ、好きでやっている仕事ですから、お気になさらず。それから物の配置はお好きなように変えてもらっても結構です。それでは、私は他の仕事があるので失礼しますね」

「うん、ありがとう沙紀さん、お疲れ」





もうすぐ夕日が沈む時間。

…遅い。

いくら何でも遅い。

今日もここで遊ぶって約束してたのに。

この時間じゃ今日はもう遊べないかな…。

ふう、帰るついでに郁と圭君にちょっと会って文句の一つでも言いに行こう。

んで、いつも以上にいぢめたる。

仕方なしにそう思い歩き出した時に、見慣れた黒く大きい車が俺の近くに止まった。

中から顔を出したのは、憲吾おじさんだった。

あわてた様子で、俺も車に乗るようにと言う。

おじさんが言うには、郁が車にはねられたらしい。

それを聞いて俺も車に乗り、病院へと向かった。

# 『咲倉紀 郁』

手書きで、そう書かれたプレートのある病室へと入った。

白い病室に、色鮮やかな花が目立っていたのを、良く覚えている。

郁は、不思議そうに俺の顔を見つめている。

「無事で良かったな、郁」

「…」

「?どうした、郁」

「あなたは、誰?わたしの、お友達?」

そう言った彼女の目は、少し怯えているように見えた…。

また来るから、と言って郁の病室を後にした。

圭君は塾に行っているが、里紗おばさんとふたりで今病院に向かっているらしい。

今は憲吾おじさんと二人だけだ。

二人して廊下にある椅子に座り、話をしていた。

郁を、守ってやってくれないか、とおじさんは言った。

返事をする間もなく、おじさんはこう言った。

「：簡単に説明するよ。事故のショックで、一般的な知識は残っているが、人物の記憶が抜けてしまって、物の記憶の一部もすっぱりとなくなってしまったようだ。それを思い出せる可能性は限りなくゼロに近い」と。

記憶喪失。

子供の俺にもわかりやすいように、そう説明してくれた。

ばかばかしい。

あまりにもばかばかしい。

これは、ドラマじゃないんだ。現実なのに。

でも、おじさんの様子や現状を見る限り、嘘ではないことぐらい分かった。おじさんは、目に少し涙を浮かべながら続けた。

「だが、思い出せないのなら、またもう一度覚えさせてあげればいい。今までの記憶がないのは悲しいことだが、私たちが不安になっただけではない。一番不安なのはあの子のハズだから、しっかりしないでいい。だから、また、今まで通り遊んでやってくれないか。有土君のことは私から話しておくから」

それから、おじさんは黙ってしまった。

俺は、子供ながらに、おじさんはえらい人だなと思った。

自分の子供がこんな状態で自分も悲しいだろうに、俺を元気づけてくれるなんて。

本当は、誰より不安なはずなのに。

俺は、この人を裏切ることはいできない。

いろいろ教えてくれた、両親の代わりにたくさん遊んでくれたこの人を、裏切ることはいできない。

初めて、心から尊敬した人。

そして、初めて人を…郁を守り続けようと心に強く、誓った。

俺は…郁のことが好きだから。

俺はおじさんに、まかせてください、と言った。



お兄ちゃんが一緒だった。お父さんがいれば連れて行ってもらえるけど今はいないし、お母さんもどこかに出掛けてていない。

めいどさんたちはいそがしいみたい。

：怒られるかもしれないけど、お兄ちゃんを待ってるなんてゲームできないから、先に一人で遊びに行っちゃおうかな。

それに私が1人で行ったら、『偉いなっ』て、きっとゆうくんほめてくれる。

：もしかしたら「そんなのふつうだな」とか言うかもしれないけど…。

：よし、行こう！

いつもと同じ道を、車に気をつけて歩いていく。

でも、ここは車があんまり通らないから、そんなに気を使って歩く事もないぞとお兄ちゃんは言ってた。でも、この道は歩道がないから気をつける事に越した事はない。

実際、家を出てから車が一台も通ってない。

だから、好きな歌を歌いながら歩いていこう、楽しいし。

まだあんまり上手じゃないし、歌詞もたまに間違う事があるけど、いつかゆうくんに聞いてほしいなあ。

そういえばゆうくん、今日出された宿題ちゃんとやるのかなあ。

明日は出席番号順でゆーくん当たるから、ちゃんと言っておい  
てあげないとまた先生に怒られちゃう。

いつもいつも怒られてるのに、宿題やってきてないのに、どうし  
てテストでいい点が取れちゃうのかなあ。カンニングしてるような  
こともないし、テスト中の残り半分くらいはいつも寝てるし…ふし  
ぎ。

あ、この信号渡ればもうすぐ会える。

今は赤だから、青になってからじゃないとだめだもんね。

少しして、パツと前の信号が青に変わり、横断歩道を渡る。

そしたら、凄いスピードで急に車が私の横に来た。

あれ…？私、信号間違っないよね…？

## 悲痛な叫び・紫遁

「おっじゃまりましたあゝ」

咲倉紀の屋敷を出て、今日も繁華街方面へと向かう。

家に帰っても特にする事ないけど、昨日の遊び疲れがまだ残ってるからとりあえず晩ご飯の材料買って昼寝でもしようかな。

…そういえば、あの二人大丈夫かなあ。

ま、私には困ったときに相談に乗ってあげる事ぐらいしかできないから、温かく見守っていきましょうかねえ…。

でも、面倒な事相談されたらどうしようかな…。

買い物を済ませ、買ってきた物を冷蔵庫や棚に片付け、ベッドに寝転がる。

やっぱり、一人は寂しいかな…。

気付くと涙が流れていた。

多分、この静けさがそう思わせたのだろう。

咲倉紀の家は暖かくて、寂しいと言う事を忘れさせてくれて、凄く居心地がいい。





明日は、お母さんが病院に入院する日。  
なぜなら、もうちょつとで妹が産まれるからだ。

お母さんと離れるのは寂しいけど、楽しみにしていた妹が生まれるんだから、ワガママ言えない。

大好きなお母さんのお腹の中には、私の妹がいる。

だから、私は妹の事も大好きになれる。

お母さんは、今日も大きなお腹を触って、にっこりとしている。

そんなお母さんの顔が、私は凄く好きだった。

だから、私もつられて笑っている。

それに気付いたお母さんが、私を見てまた笑ってくれる。

まだ子供だから分からないけど…幸せって、こういうことなのか  
なあ？

でも、お母さんの表情が、なんだか変わってきた。

汗を拭いてあげようとしたら、急に苦しそうになって息をはあはあしている。

おかしいと思って、部屋で仕事をしていたお父さんをお呼んできた。  
お父さんは、妹が生まれそうだから、紫遥も一緒に病院に行くよ、  
と言った。

私は隣に住んでるお兄さんをお呼んできて、お母さんを車に運ぶのを手伝ってもらった。

救急車を呼ぶより連れて行った方が早いとお父さんが言ってて、  
お兄さんも同じ事を言ってた。

車の中で、私はお母さんの顔を拭いてあげている。

病院はそれほど遠くはなく、しかも近道があつて、そこはあまり車を通らない道だから早く着くつて、運転しながらお父さんは言つていた。

はやくしないと、お母さんがすごく辛そうだよ！

そう言いながら、お父さんに早く病院に行つて、と急かしていた。

いつもよりすごく早いスピードで、道を走っている。

危ないなあとは思つたけど、お母さんも危ないつてお父さんが言つてゐるから、そんなことは言つてられないと思つた。

お母さんが少し落ち着いて、私は前を向いた。

ちよつと先の信号は、青から黄色に変わるところだった。

お母さんの方を見ると、また苦しそうにはあはあ言つてゐる。

もう一度汗を拭いて上げようとする、車が急に止まつた。

がくん、となつた。お母さんは辛そうに、さっきと同じようにはあはあ言つてゐる。

どうしたの、と聞くと、もうちよつとで子供をはねそうになつたつて言つた。

はねそうになつたつてことは、はねてないつてことだから、よかつた。

ちらつと外を見てみると、女の子がぺたん、としりもちを付いてゐる。

ほ、よかつた：見た感じではケガしてない。

大丈夫？ごめんね、とお父さんはその子に言い、それからもう一

度車を発進させて、何とか病院に着いた。

着いたときも、お母さんは相変わらずだった。

それから二人は病室に入っていたけど、私はすることがなくて病院の中を歩いていた。

こんなに広いところは学校以外では初めてだから、ちょっと不安だった。

1時間ぐらい歩いていたら、少し疲れた。空いている椅子があったので。そこに座って休んでいた。

そしたら、お医者さんたちが何人か、遠くの方から走ってきた。口々に、何かを話しながら、急いでいる様子。

側を通ったときに担架の上に乗っていたのは、私と同じくらいの女の子だった。

あれ？あの子さっきの…？

ばたばたと通り過ぎた後、お父さんが私を捜しに来て、妹が生まれた、と言った。

でも、お母さんも妹も疲れてるから、今日は帰ろうと言った。

私はうなずき、お父さんと一緒に帰った。

次の日、私が学校に行くと、隣のクラスの女の子が事故にあったって聞いた。ケガはない、と聞いたので、昨日お父さんがぶつけちゃいそうになった子だろう。名前を先生に聞いたら、私も知っている子だった。

学校が終わって、お父さんと一緒にお母さんと妹のお見舞いに行った。行く途中の道で、昨日の信号で車が止まった。

お父さんにその子のことを言うと、先にその子のお見舞いに行こう、お父さんはごめんなさいを言いね、と言った。私も、それがいいと思った。

# 『咲倉紀 郁』

先生から聞いた名前の通りだったので、ノックをして病室に入

った。

白い病室に、色々なお花がとってもきれい。

あとでお父さんに頼んで、お母さんと妹のために同じようなお花を買ってもらおう。

部屋には、ベッドの上に昨日の女の子、その近くには男の人と女の子がいた。多分、女の子の両親なんだろう。

私は、お母さんの方に、持っていた果物のバスケットを渡した。

その人は、嬉しそうにありがとうと言って頭を撫でてくれた。

：気持ちいい。お母さんにも撫でてもらうかな。それとも、私がお母さんを撫でてあげようかな。うん、そうしよう！

お父さんは、その二人に昨日のことを説明していた。車の中で、お父さんは、怒られちゃうかもねって言ってたけど、怒られているようには見えなかった。

男の人は、この子も、生まれてきた子も無事なら、それでいいです、少し間違えば二人とも死んでしまっていたのですから、と言っ

ていた。

記憶喪失、と言う言葉も聞こえた。どうやら、あのときのショックで記憶が飛んでいってしまったようです、と女の人は言っていた。

：お父さんは怒られずに済んだみたい。

用事が済んだので、今度はお母さんと妹のお見舞いへと行くことにした。

妹には遠目から会えたけど、お母さんには会えないって言われた。

どうして？ってお父さんに聞いたら、

今日の朝、私が学校に行ってる間に死んでしまったって言った。

妹を産むときに、すごくがんばりすぎたって。紫遥があんなにも楽しみにしていた妹だから、どうしても産みたかったって、お母さん、最期にお父さんに言ったらしい。

：ばかだよ、お母さん！！

わたしは、病院内にもかかわらず、大声で叫んでいた。

私は妹も楽しみにしていたけど、お母さんのことがすごくすごく好きなのに。

私は、妹よりもお母さんがいた方がいいのに！！

なんで、なんでなの!!???

お母さんを死なせた妹なんて、好きになれるわけないよ!!!!!!

全部、お父さんが悪いんだ! あんなに危ない運転して、お母さんずっと辛かったのに!

それで急に止まるから、お母さん余計に苦しそうだった!

あの郁って女の子が記憶をなくしたの、お父さんのせいなのに!  
!!!!

だったら、お父さんがあの子みたいになればいいのに!!!!!!

なんで私までこんな嫌な目に遭うの!!???

ただただ、悲しくて。感情のままに、叫んでいた。

…もう最後の方は何を言ってるのかわからなくなっていた。

誰に言っているのかすら。

お父さんにしがみつきながら、ただお母さん、お母さん、と泣いていた。

お父さんも、悲しそうに泣いていた。

気付いた。

お父さんも、悲しくないわけがない。お母さんのこと大好きだったのに。

お母さんが大好きだから、結婚して、一緒にいたのに。

今度は、お父さんを傷つけてしまったことが悲しくて、思い切り泣いた。

お父さんごめんなさい、ごめんなさいと。

次の日、お父さんは言った。

紫遥が妹のこと好きになれないなら、親戚の人に預かってもらうこともできるんだぞって。

私は、考えた。

お母さんは、私のために妹を産んでくれたんだから…、私がお母さんの代わりになるって、決めた。

そうお父さんに言ったら、またお父さんは泣き出した。ごめんな、ありがとうって…。

それにつられて、私もまた泣いていた…。





## 初めての夜

「…っ」

夢…だったのか。

いや、夢と言うよりは、記憶に残っていた映像が再生された、と言うべきか。

そういえば、あれからか…俺と郁が、力を扱えるようになったのは。どれくらい寝てたんだろう…。ポケットのケータイで時間を確認した。

「うおっ…」

沙紀さんにこの部屋へ案内してもらってから、既に4時間程が経過していた。

現在時刻は、午後7時をすこし回ったところ。そろそろ飯の時間か…。

こんこん。

「はい？」

「晚ご飯の用意が整いました」

扉の向こうから沙紀さんの声が聞こえた。

「すぐ行きまーす」

返事通りに、すぐに食堂へと向かっていった。

「有土、寝癖？それ」

「あ？」

「制服のまま寝てしまわれたんですか」

「ああ、余りにも気持ちよくて」

さっきまで多少寝ぼけていたから気付かなかったが、ブレザーのボタンは外れていて、Yシャツははだけていて、ネクタイも首からぶら下がっているような状態だった。

「全くもう…しゃんとしなさい」

「郁様も似たようなものでしたけど？」

「うりゆ…」

「何だ、お前も昼寝してたのか」

「ん、ベッドがあんまりにも気持ちよくて」

「俺もだ…あれには逆らえん」

郁は、俺の正面に立って格好を勝手に直し始めた。

「あら、らぶらぶですわ」

またこの人はそーゆーことを…。

「はい、終わりっ」

またも頬を赤くしている。

いやゝかあいいなゝ…。

ありゃ？そういうえば圭君も憲吾さんも里紗さんもない。

「あの、他のみんなは？」

「旦那様と奥様は、若い二人の邪魔をするのも悪いだろうと言って別室で食事をとられています。圭様もそちらにいますよ」

「昨日も今朝もあんなにはしゃいでたのに…変な気遣わなくてもいいのになあ…」

「みんな一緒の方が楽しいのにね」

「それなら後ほど伝えておきますね。では、席についてください」  
「ん」

「それでは、いただきますよー」

「「いただきます」」

例によって郁が手伝って作られた料理。

破滅的な物がないことから、郁はそれなりのセンスは持ち合わせていると思う。

「で、郁の料理の腕はどんなもんです？沙紀さん」

「そうですね、普通の方よりはセンスは感じられるんですけど…」

「何か問題でも？」

「包丁で刻むことはできるんですけど、果物やニンジンなどの皮むきができないんです」

「は？基本だろ？始めに教える物なんじゃ…」

「それがねー、何かダメっぽいの」

「たとえばリンゴを持たせるのは平気なんですけど、一緒に包丁を持たせると郁様が嫌がるので…」

なんじゃいそりゃ。

「包丁で野菜とか刻めて、皮むきができないはず無いだろう」

「前ねー、お母さんがやってるの見てて、お母さんがケガしたこと

あるのね。それで結構血が出てたの覚えてるから…そのせいかなあ？」

「トラウマのようなものでしょうか？」

「どうだろうな。ま、どうせずっとこの家にいるんだから、沙紀さんとかほかのメイドさんができれば問題ないな」

「はい、その通りです。これからもしばしいきますからね、郁様」  
「うっ……」

「…ま、がんばれ」

何気に沙紀さんって厳しそうだもんな…。仕事も何に関しても徹底してるみたいだし。  
後は郁次第。

ちらっと、郁の方に目をやる。

「ぶるぶるぶるぶる…」

…だめっぽい。

食事が終わると、郁が話しかけてきた。沙紀さんは、片づけに入っているようだ。

「ね、後で有の部屋行ってもいい？」

「？別に構わないぞ」

「んじゃあ、行く前にメールするね」

「ん、了解」

家、広いもんな…。

足音でもわかりにくいし。

しかし同じ家の中でメールするのもおかしな話だ…。

「あと、後片づけも手伝えよ。準備に始まり片付けに終われ」

「手伝おうとしたんだけど、なんか思いつき拒否されたの」

「？」

「私そんなに慣れてないから、力使って手伝おうと思ったんだけど」

「はあ」

「家事ってどの天使に力借りればいいのかな？」

ガクッ。

「そんなことで力使うな！お前はいつも無駄遣いしてるな」

「いやあ…てへへ」

「照れるな！」

「じゃ、じゃあまた後でね」

ぱたぱた、と駆けていった。

逃げたな…。

家事手伝いの属性を持つ天使なんていたっけ？

…ロビンググッドフェロー？

あれは妖精か精霊か何かか…。

というか、その程度で力使おうとかどれだけ力を持て余してるんだ？  
俺なんか一度使えば疲労感でその日に二度目なんて使おうと思わないぞ…。

まあ、とりあえず俺も部屋戻ろう…。

ピロ〜リ〜！

風呂（俺専用）上がりに部屋に戻ってくると、ちょうどケータイが鳴った。

…郁か。

『今から行っても兵器？』とある。

阿呆。

兵器なわけあるかい。

『兵器だ〜』とメールを返す。

時間は…もう10時か。

こんこん。

「どうぞ」

しばらくして、郁が来た。

「おじゃまします」

「お邪魔されます」

あ、そうだ。

「さすがにあの誤変換にはしてやられた」

「うっ…いいでしょ別に。伝わったんだから」

「どんだけ緊張してんの」

「べっ…別に緊張なんて…ここ私の家だし」

郁は、きよろきよると、部屋を見回す。

「…ホント、あんま部屋変わってないね」

「まあな」

「でもちよつと違和感。天井高いし、物と物の隙間広いし」

「うーん、どうしたものかなと考えてはいるが。隙間埋める物も特にないし」

「ま、そのうち慣れるでしょ。有、神経ぶつといし」

「失礼なヤツだ」

とてとてと、ベッドに腰掛けている俺の横まで郁が来る。

「どした？郁」

「や、こうするの久しぶりだなんて」

と言って、俺の手を握ってきた。

「子供の時…っていつても、小学生の時以来かな」

「そんなもんかな」

「えへー、はっぴーだよぉ」

「そか」

「んもお、リアクション薄いよ。もっとう、言葉やら行動やらで『俺もはっぴーだぞ』とかしてくれてもいいじゃん」

…なんか昨日の朝も似たようなことしてたような気が…。  
昨日は何故か怒ってたんだよね…。ま、ここで怒られるのも何だし…。

「ああ、俺もはっぴーだぞ」

軽く握られた手に力を入れてやる。

「…やっぱり似合わない、有にそーゆーの」

くすくすと笑っている。

してやられた感じ…。

「でもね、私、そんな有が大好きだよ」

「郁…？」

「有は…ぶっきらぼうで面倒くさがりだって周りの友達は言うけど、私は…有が本当は誰より優しくて、心配性だってこと知ってる」

「ほめてんのか？」

「もちろん。有は、私のことは、好き？」

そんな真顔で言いますか。

って普通真顔になるだろうけどさ。

「もちろん好きだ、郁」

言って恥ずかしかった。

郁もそれを聞いて恥ずかしがっている。



と、郁が急に顔を近づけてきた。

「キス、してほしい…」

「郁…?」

「有士が、私のことを好きっていう、確証がほしい…」

ためらうことはなかった。

俺たちは、自然に唇を重ねていた。

5秒程の、短いキス。

口を離すと、いきなり抱きついてきた。

「郁?」

「…恥ずかしかった。顔真っ赤になってるから。こうしてれば見られないし」

「なぐる」

茹でダコ発生。

「…キスって、気持ちいいね。これからもたくさんしたい」

「郁が望むなら、いつでもしてやる。ただし、人がいないところでな」

「もちろんだよ、人に見られたくなんてないもん…恥ずかしいからね」

抱きつくのをやめて、もう一度唇を重ねる。

今度は、お互いを求めるような長いキス。

不慣れだが、それでも一向に構わないと思った。

目を開けると、幸せそうに頬を赤く染めた郁の顔が間近にある。深く、深く。

舌を、郁の口の中に割って入るように入れると、初めは何やら戸惑う感じがしたが、だんだんと舌を絡めてきてくれた。

「っはぁ…」

唇を離し、お互い見つめ合う。

「郁、別に息止めてなくてもいい。ちゃんと呼吸しないと辛いだろう」

「へ？でも…」

「息がかかるのなんて気にするな」

「ん、わかった」

ちゅ、と俺の頬にキスをした。

ふと、間。

「やっぱり恥ずかしいもんだ」

「…うん」

「とりあえず、今日は戻ってくれ。今これ以上一緒にいると…たぶん、おさまり利かなくなりそうだ」

「…私なら、いいよ」

「…え？」

「有が望むなら、私は…有に全部あげるよ。そのつもりで来たんだし…」

「…郁」

その言葉がきっかけで、俺は郁を抱きしめる。

もう、止まらなかった。

笑いが。

「顔、真っ赤だぞ、郁」

ポカッ、と軽く頭を小突いてやる。

「そんなに顔真っ赤にして目回して、お前そんなに恥ずかしいならもうちょつと精神を鍛えろ」

「むう：なんかダメ、緊張しすぎちゃって頭ふらふらすゆ」

：だめだこりゃ。

ガチャ。

「あらー、郁様大事なところで限界でしたか」

「え、ちょ」

沙紀さん？

「仕方ありません、部屋にお戻りになりますか？ 郁様」

「ふえー、あたしもうだめ」

ぱたん。

きゅー。

俺のベッドに倒れ込んだ。

「残念でしたね、有土様」

「いや、いい。どのみち郁がこの状態じゃどうしようもないし」

「それでは、おやすみなさいませ」

郁をお姫様だっこし、沙紀さんは部屋を出ていった。

なかなかの筋力だ。

「うーん…」

もし俺と郁にナニがあったなら、それは全て沙紀さんに筒抜けだったと…？

はっ！？

ということはさっきまでの恥ずかしい流れ全部聞かれてた…！？  
いや沙紀さんのことだ、全部見られてた可能性も…！？

はあ…。

もういいや、とりあえず寝よう…。

## 変わり始めること

翌日。

郁は吹奏楽部の練習で先に学校へ行っていた。

圭君は調子が良くないとかで、休むか遅刻してくると言っていた。そんなわけで、今日は途中で会った紫遥と登校してるのだが…。

「どうした紫遥。いつもの元気がないように見えるのは俺の気のせいかな？」

「ん、ちよつと夢見が悪くて…」

「その割に寝不足には見えないが…？」

「夢見が悪かっただけで、何も寝てないとは行ってないでしょ」

「そりゃそうだ」

「16時間は寝てたわ」

寝過ぎだっつーの。

「お前朝は早いんじゃないかったか？」

「毎朝7時起き」

…普通じゃないのか？

「ってゆーか、それじゃ寝たの午後三時ぐらいか？」

「多分…。気付いたら朝だった」

「はあ…ま、夢なぞそんな気にするモンじゃないぞ。今を生きろ」  
「ん、そうだね」

それから何故か無言のまま、学校へ着いた…。

昼休み。学食戦争へいざ参る。

学食の同志、紫遥の姿が見あたらないが、先に行ってるだろう。席奪い取ってやる。

チャイムと同時に教室を出るために扉をがらっと開けた。

「あら、有士様。どうなされたのですか？」

「…何でいるんすか」

「あー沙紀さんだ。どったの？」

「はい、仕事に余裕ができましたので、お弁当を作って参りました」  
「それはありがたいですけど、別に扉の真ん前にいなくてもいいじゃないですか」

「偶然ですわ」

さいでつか…。

「でも、家は平気？」

「はい。しかし、侍従が一人増えて私と仕事を分担してやることになったんです。私は厨房・お二人の御世話をメインに、新しい方は清掃や買い出しがメインになりました。当然、郁様と有士様のお世話もさせますよ」

「と言うことは、俺たちにもう一人お付きのメイドができた…ってことか」

「そっか、有士の世話も増えたから、沙紀さん一人じゃ大変だもんね」

「はい。ちなみに旦那様が面談で一発でOKを出されました」

って、面談は憲吾さん自らやるんかいな。ま、家主だし当然と言え

ば当然なのだろうけど。

「ってことは、父さんの知ってる人なんだ。一発OKなんて滅多に出さないのに」

「はい。郁様と有土様もご存じの方ですよ」

「へえ、誰？」

「それは帰宅してからの楽しみです♪」

弁当箱を2つ俺に手渡して、颯爽と廊下の向こうへ消えていった。

「ほんじゃ、食べよっか」

「お前は気にならないのか？新しいメイドのこと」

「別にー？どうせ帰れば会えるんだし。それより今はお昼ご飯よ！私のお腹の中のランゲルハンヌ島の小人さんたちが救いを求めているの」

「一体どこの小人さんだ…」

「ここ！」

びっと、お腹の辺りを指さした。

「聞いた俺が悪かった…ほれ」

片方の弁当箱を渡す。

早速開けると、美味そうな彩りの弁当が現れた。

「いたどうあきましゅ〜」

「…いただきます」

不明な言葉に流されることもなく、昼休みは過ぎていった…。



「有士、帰ろ」

「応」

授業も滞りなく寝てやり過ごし、いつの間にやら放課後になっていた。

生徒玄関で靴を履き替えると、特に用事もないので二人して咲倉紀の屋敷へ帰る。

「でも、誰なんだろうね、新しいメイドさんって」

「帰ればすぐに会える。つーか郁が昼飯優先してろくに話題にならなかったろーに」

「うー、何か気になって仕方ない」

「ちょっとぐらい辛抱しろ」

「やー」

「やー、じゃなくて…」

なんでこう突発的になるかなあ…。

「ごめん有、私先に行ってるね」

「ああ？」

「ラシエルに捧ぐ…ケテル、ホドにより、そなたを使役せん…」

ぶわあっと風が舞い、郁の身体は中空高速であつという間に見えなくなった。

あ、パンツ…とおもったら中身は短パン装備だった。

ラシエル…竜巻とサイクロンの天使。

よく使いこなせるな。まあ、アフを使いこなせるくらいだから朝飯

前って感じか。

つか、まーた不必要に力使って…。

ま、俺はゆっくり行こうかね…。

## これも一種の告白

「お帰りなさいませ、有土様」

「ただいま、沙紀さん。で、郁どこにいますか？」

「郁様の部屋でお待ちですよ。件のメイドも一緒です」

「ども」

焦ることもなく、至ってマイペースで郁の部屋へ向かおうとした。

「…おもしろくなりそう♪」

聞こえてしまった。…なんか、怖いような楽しみなような…。

こんこん。

郁の部屋の扉をノックした。

「どうぞ」

返事の後に、扉を開けて中に入った。

「遅いよ、有土」

「お前が不必要に早いだけだ」

力使ってまで早く来る意味ないだろうに。

郁の反対側には、沙紀さんと同じメイド服をきた人が座っている。  
今の俺の位置からは、後頭部しか見えない。

「で、その人が俺たちの知り合いつて人か？」

「うん、そうだよ。今日はもうお仕事ほとんど終わってるから、こ  
うやって話してたんだ」

「ほ。で、どちらさん？」

「がたっ！」

その場に急に立ち上がり、

「じゃーんじゃじゃーん！実は私です！！」

と、ポーズを取りながら言った、見慣れた面。

「田舎さ帰えれ」

「んなっ!？」

「あはは…」

「…っつか、まじですか…?」

悪夢であってほしい…。

「あ、驚いてる驚いてる」

「そりゃ驚くでしょうよ」

「当たり前だー！紫遥、いったい何の冗談なんだ!？」

「あー、ちゃんと全部説明するから、いちいちそんな叫ばないでよ」

叫びたくもなるわい。

「私も、何で家で働くことになったのかまだ聞いてないんだよ」

「…働く?ここで?お前学校はどうする気だよ」

二人の近くに置いてある椅子に腰掛け、話を聞く体勢になる。

ぶうふうふうふう。

どこからか、人体ガスが発射される音がした。

「あっ はははははははははは！」

：どうやらはめられたらしい。  
クッション君に。

「…ムカツクなあ…何がそんなに面白いんだか」

「だ、だって……あははははは！」

「あんなバレバレに仕掛けてあったのに、疑いもせず座るんだもん！ もーおかしくっておかしくってー！」

「真面目に話をしようと言う気はないのか!？」

「ごめんごめんゝあははははゝ！」

「てめえらいつぺん落ち着けー！！」

「で、一体どういう事なんだ？」

「…まず、二人にはごめんなさい、って言うておく。…色んな意味でね」

「別に何も謝ることはないんだけど…」

何とか二人を落ち着かせ、話を聞く状態に持ち込めた。

なぜ俺ばかり、無駄に疲労？

「まず始めに。有士は知らないと思っているだろうけど、私は郁が子供の頃の記憶がないのを知っているわ。それが、記憶喪失だっていうことも」

⋮

「…何で？」

紫遥は、郁の方に向き直る。

「郁、憲吾さんから聞いている？ 郁が記憶喪失になってしまったわけを」

「…うん、聞いてないよ」

「有土は？」

「…知ってる。信号無視の車に轢かれそうになったけど、ギリギリで車が止まった。ケガはなかったけど、いきなりのことでショックを受けたんだろうって…」

「…」

「…その通り。あの時、その車の中には妊婦がいたの。予定より数日早く陣痛がきて、救急車や医者を呼ぶよりも家から病院に連れて行った方が早いと判断し、すごいスピードで道を走っていた。ドライバーは…私の父」

「…」

予想しえなかった意外な事実にも、言葉の一つも出てこなかった。それは、郁も同じようだった。

そんな俺たちの空気を知ってか知らずか、紫遥は続ける。

「…妊婦は確かに危ない状況だった。だけど、信号一つ遅れただけでどうにかなるほどってわけじゃなかった。それでも、その妊婦…もう隠す必要もないかな、私のお母さんは、とても辛そうな顔をしてた。私は、そんなお母さんの顔を横で見てたらいたたまれなくなつて、父に早く、早くって、急かしてしまった」

「…」

「…」

「…車は郁にぶつかることはなかったけど、その直後、私が病院で父を待っているときに、偶然郁が運ばれてくるのを見た。その後、私は父と一緒に家に帰った…」

そこまで話して、いったん紫遥は止めた。

「…」

下を向いたまま、郁は紫遥の次の言葉を待っている。

姿勢を戻し、再び紫遥は口を開いた。

「次の日、私は父と一緒に郁のお見舞いに行ったの。母と、生まれてきた妹のお見舞いも兼ねて。郁の病室には、憲吾さんと里紗さんがいた。父が事情を説明すると、二人とも複雑そうな表情になりながらも、父を許してくれた。2つの命が助かったから、それで良かった、って言ってた。私は、その時郁の顔をちゃんと見ることでできなかった。郁の人生は、私が壊してしまったようなものだから。私が父を急かしたりしなければ、あんな事にはならなかった…！」

高ぶった感情を何とか抑えながら、紫遥は続ける。

「…そしてその日、私が学校に行っている間に母は亡くなったわ。そのことを憲吾さんたちは父から聞いて知っていたから、父は責められなかったんだと思う…」

そこで話をまた切ると、紫遥の嗚咽しか聞こえなくなった。

「何か…やるせねえな…」

誰が悪い、と言う問題じゃないと思う。

確かに、紫遥が父親を急かしたことはないとは言えない。

紫遥の父親自身に問題がなかったとも言えない。

それに、子供として親の心配をすることの、何が責められるのだろう。

「泣くことはないよ、紫遥…そーゆー理由なら仕方のないことだと思う。私に一部分の記憶がなくても、今は家族がいて、有士がいて、紫遥もいて、幸せだから…」

「そうだな、その件に関しては、郁はもう克服してるわけだし…」

まさかこんな変わった性格になるとは思いもしなかったけど。

「でも、妹さんがいるなんて知らなかった…」

俺、実は昔聞いたことがあるけど。

「…父と一緒に暮らしてる。結構私と似てるところが多いみたい。今でもたまに会いに行くしね」

そう言う紫遥の表情は、少しだけいつもの笑顔に戻った。

「有士、今日私夢見が悪いって言ってたでしょ？ たまたま、そのこと夢に見ちゃって…考えた末に、今日また憲吾さんに頼み込んで、こうしてメイドとして咲倉紀家のお役に立とうと考えたわけ」

「なるほどな。でも、何で中学の時にこっち戻ってきたんだ？ まさか、犯してもいない、自分で決めつけた罪を償おうとでも考えてたか？」

「…良く分かるわね」



馬鹿か、こいつは。

どこまでも、素直。

良くも悪くも、これが紫遥の特徴だつてのはよく知っている。  
だが、考えすぎだ。自分のせいにする必要なんてないのに。

「どうしても私の心の中に郁のことが残ってて、それで憲吾さんに頼み込んだんだけど、そこまでされるとこっちが悪い、とか言っ  
てしかも私がこっちに来るって言ったら、一人暮らしできるように色  
々手配してくれたの。償いたいというのなら、郁と友達になっ  
てくれ、とまで言われた。あんないい人、滅多にいないよ。」

そうか、だからこいつもずっと同じクラスだったのか。

「…じゃあ、紫遥はお父さんに言われたから私と友達になったわけ  
？」

「…え？」

「有も、そうなの？」

「は？」

「二人とも、父さんに頼まれたから、私と友達やってるの？」

「そんなわけないでしょ！？初めは確かにそういうところもあった  
けど、今はもう違う！私は、郁のことが心から大切だから、一緒に  
いて楽しいから郁のそばにいるんだよ！？」

ぴーん、と空気が張りつめた。

## 犠と儀

どこか、強大な力を感じさせる。  
この空気は、まさか…!!?

「嘘…」

部屋が、薄紫色の煙に包まれる。

「待て、郁！お前何を喚ぶ気だ！犠式もしないでそんな大きな力使ったら…!! ってゆーか、何いきなりキレてんだよ…!!」  
「……………」

聞こえているのか聞こえていないのか、感情の読めない目で俺たちを見つめる。

自分の記憶喪失の真実、  
そして俺たちがそばにいることの真実。  
知ったことで、精神が不安定になっちまったっていうのか!?

短絡的すぎるが、そういえばそんな性格なんだ…。

「嫌…父さんも、紫遥も、有も…みんな…!!」

突風が吹き荒れる。

「きゃあっ!!」

呆然としていた紫遥は吹き飛ばされ、部屋の壁に叩きつけられた。

しまった！

紫遥は天啓を得てないから、相殺されるはずのダメージがそのまま身体に行ってしまう。

紫遥に駆け寄ると、幸い気を失っているだけのようで、大事には至らなかったようだ。

その場所に紫遥を横たえ、郁と対峙する。

郁の周りには、膨張して割れんばかりの気が感じられる。

「さあ、アポリオン…」

…アポリオン？

こんな厄介な物まで喚べたのか。全てを滅ぼす者、として語られるアポリオン。

郁のキャパシティって、一体どれくらいなんだよ…。

「有、私信じてたのに悲しいよ…有も、父さんに頼まれたから、私と一緒にいてくれたんでしょ？もう、無理しなくてもいいんだよ…」

抑揚も、感情もない言葉。

郁の気が、一気に高まる。

再起不能にしてやる、ってことか…。

かなり誤解されたままで死にたくはないな、うん。

力を持たない紫遥への影響

必要以上の力を行使しようとする郁自身への影響  
そして、その力の矛先となる俺への影響…

それらを考えると、戦いはできるだけ避けたい。

これ以上、誰かが傷つく意味もないはずだ。

郁も紫遥も、それぞれが辛い思いを抱えていた。  
出過ぎた真似かもしれないが、俺が何とかしないといけない。

「郁…お前は何でその力を使えるようになったか、理解してるか？」

少しも動じることなく、郁は答える。

「強くありたいと願ったから。私には記憶がなかった。そのことで周りの人みんなが混乱してた。だから、せめて私のことで迷惑は掛けたくない、願ったからだと思う。この力を得たときの記憶はあるから、間違いないよ…。何でそんなこと聞くの？」

「お前は…何で俺が力を使えるようになったか、考えたことがあるか？」

「…」

俺から目をそらし、俺の次の言葉を待っている。

何とか、話が通じそうか…？

「俺はな、お前を守りたいと強く思ったからだ。確かに、憲吾さんに頼まれたこともある。でもな、俺はその前、記憶を失う前からお前のことが好きだった。お前が記憶を失った後、お前を不安にさせないために、俺が一生かけて守っていこうと強く願ったから、この力

が目覚めたんだと思う。お前は一生懸命色んな事を覚えようと、必死で努力したよな。俺は、そんなお前の支えになりたかった。だから、ずっとそばにいたんだ」

郁の周りの気配が、揺らぐ。

「嘘…」

「嘘じゃない。そうじゃなきゃ、婿入りなんて来るはず無いだろ。俺は普通の日常で十分なのに婿入りなんて面倒なこと受けたのは、お前のため、そして俺自身気持ちも、結果的にそれを望んだからだ。わかるだろ？俺の性格考えれば…」

郁は、俺から完全に顔を背けた。精神もブレが生じている。

今しかないっ！

「サリエル、頼むっ！」

パシユン！

すう、とアポリオンの気配が消えていく。

なんとか、抑えられたか…。

しかし、俺自身も辛い。

郁にさとられぬよう、儀式無視でサリエル喚んだからな…。

郁の方に目を向ける。

…床に突っ伏していた。

「郁!？」

呼吸が荒い。

儀式をしないで力を使ったことの副作用か!

儀式なしで力を使うことのリスクは、力が消えること、あるいは…。

死。または死同等の苦痛…。

しかも、強力な者を呼び出したから、その代償は大きい。

「冗談じゃないぞ…」

尋常じゃない事態。

くそっ、俺ももう一度力を使うしかないか!?

郁の呼吸が、見る間に小さくなっていく。

儀式をするヒマもない!

「ラファエル!!」

ばあ、とラファエルが顕現する。

「…それで、我はどうすればいいのだ？」

「頼む、郁を助けてくれ！！」

「儀式を行わなかった者の、当然の報い、か…それを救おうとする  
汝にも、覚悟はあるのだろうか」

「当然だ！じゃなきゃ儀式もしないであんたを喚ぶはずない！！」  
「…」

しかも、二度目だ。俺自身の体もどうなるか…。  
だが、郁や紫遥の耐えてきた辛さに比べれば…！

「お願いだ、頼む…」

「顔を上げよ」

「…え？」

「…よい瞳をしている。私が一番好む瞳の色、魂の輝きだ…。まさ  
か、このようなところであの血脈に出会えるとは…」

「…ラファエル？」

血脈…？なんのことだ…？

「我は汝のその瞳を、汝が消えるその日まで見届けたいと思う」

「…それじゃあ」

「汝らを死なせはしない。だが、生死の境にある人間の魂を再び元  
の状態に呼び戻すという、理から外れた力を駆使する。それは、古  
の盟約により天啓を失う可能性が非常に高くなるということだ。そ  
れでも構わぬか？」

「もちろんだ！」

何も戸惑う必要はない。

郁を救えるなら、力が無くなっても構わない。

「それだけではない。汝の体にどのような影響があるとも知らぬ事だ。承知の上か？」

「何回言わせりゃいいんだ！はやくしてくれ！」

それくらい分かってる。でも、このまま郁を死なせたりはしない。

「…ふ、聞くだけ野暮だったか…」

ラファエルは郁の頭上に手をかざし、何やら唱えている。すると、だんだんと郁の呼吸も顔色も落ち着いてきた。

「…では、我は還る…有士よ、永久に汝らを加護しようぞ」

そう言い残すと、ラファエルはすうつ、と消えていった…。

「（…山階有士…彼らの血を引く者…まだ望みはある、か…）」

「…???」

不意に、頭の中をかすめた声。

…意味わからん。



## 小国円

とりあえず郁と紫遥を郁のベッドに運んで寝かせ、俺も一息つく。

「ん…」

「気付いたか、郁」

「有土…ごめん、迷惑かけちゃって…」

「今更始まった事じゃない。気にするな」

「うん…でも、一つだけ聞かせて」

「何だ？」

「有土は、今の私のことが好きなの？それとも、記憶を失う前の私が好きなの？」

馬鹿な質問だ…。

「さっきも言っただろ？どっちも郁に変わらない。どっちの郁も、俺は好きだからな」

ちゅ、と郁のほっぺにキスをする。

「…ありがとう」

頬を赤らめて、顔を半分布団に隠してしまった。

うあー、うあー、うあー！かわいい仕草だなあもお！！

「…何か凄いタイミングで、目え覚ましちゃったみたいね…」

「うお、紫遥！？」

「あーあー見せつけちゃって。その半分の愛情でも私に向けてくれない？でも良かったじゃない？」

「…」

「…」

「冗談よ、冗談。有士にその気がないことぐらい知ってるから」

…何か引つ掛かる言い方だな。

「紫遥、さっきはごめん…」

「謝るくらいなら始めっからやんなきゃいいのよ。全くもう…郁がそんなんだったら、有士のこと任せられないじゃん」

「は？」

「実は、この屋敷にメイドとしてきた理由には、あと2つあるんだよね」

「何？」

「一人暮らしで寂しかった。だから、家族の暖かさに触れていたかったのが一つ」

「もう一つは？」

「…まだちょいと有士のことあきらめきれてないから、チャンスがうかがって奪っちゃおうかな、ってゆーこと♪」

待て。

話が変な方向に行きそうだぞ。

「そ、それはだめだよ！有士は、私の婚約者なんだからー！」

「婚約者って事は、まだ結婚してないって事でしょ？ならまだ逆転ホームランがあるかもしれないじゃん？」

「結婚してるも同然なの！」

「はいはい、そうですか」

「だいたい、メイドなら立場の違いってモンがあるでしょ！そんな図々しく言わないでよね！」

「あら、メイドだからこそこでもできることもあるわよ。た・と・え・ば、

夜のご奉仕と・か♪」

「それなら私で十分だもん！身体だっていつでも来いだもん！！」

「関係ナツシ〜ング」

「あら、夜のご奉仕なら私もできますよ？」

「っていつからいたあー！！？」

「一度戻ってお茶をお持ちしましたら、何やら騒がしいご様子でしたので出るタイミングを計っていたのですが…なんとまあ絶妙なタイミングで入れたのでしよう。自分をほめたいですね」

沙紀さん…ホント強者だ。

「勝手にほめてていいよー！」

「それよりも、なーんで沙紀さんがご奉仕する必要があるんですか！？」

「あら、だって今は有士様がご主人様ですし…結構有士様のこと気に入ってるものですから…」

「年上は賞典除外！黙っててください！今は郁と話してるんですから！」

「…（ぷちっ）」

あ。

やばそう。

「紫遥さん…？」

「何ですかっ」

「ちょっと向こうでお話、いいかしら…？」

「後にしてください！さっきから行っているとおり、今は郁と…」

「問答無用っ！！」

がしいっ!!

紫遥の首筋をつかみ、そのままずるずると引きずっていく。

「では、郁様有土様、失礼します」

笑顔が壊れますよ、沙紀さん。

…とは言えなかった。

ばたん。

「…いやあ、モテる男は辛いな…」

「それって洒落になってないって事、わかって言ってるでしょ？」

「男としては一度は言ってみたい台詞だ」

「あ、そ…」

半ば呆れたように郁はそう答えた。

「ちなみに、年上も嫌いじゃないぞ。もちろん年下もだ」

「節操なし」

「言うな。一番好きなのはお前だ」

「えへ…」

照れた。

うむ。

遠くから、紫遥の叫び声と沙紀さんの高笑いが聞こえる。

「何だか…これから騒がしくなりそうだな」  
「うん…」

これからの生活に一抹の不安を感じる。

「ま、なるようにしかならんだろ」

## 小団円（後書き）

大団円とはまいりません。

ひとまず、第一部はここで終了となります。

更新ペース遅れます。

が、物語としての完結まではまだまだ先となります。

彼らの行く先を、一緒に見守っていただければと思います。

ここまでご覧いただき、ありがとうございました。

また、お会いできることを願って…。

## 設定（前書き）

タイトル通りと言うことで…  
専門用語とまでは行きませんが、用語説明と人物説明を、少し。

## 設定

出典により多少意味の変わるものもありますが、この話ではこれらの意味で話を作っています。

f i o r e t t i : 日記のような形態で文字に残された、天使介入の話を集めた物

天啓 : 神により与えられた、天使などを使役できる能力・素質

儀式 : 天使などの力を使役する前に行う行為。これを行わずに力を使った場合、代償として身体や精神に異常が起ることがある

ケテル : 神の意思や思考

コクマー : 宇宙に関する神の計画

ビナー : 神の知性

ヘセド : 神聖な愛

ゲブラー : 神聖なる審判（神の揺るぎない判断）

ラーミン : 聖なる情熱（ティファレト…美、となることもある）

ネツアー : 持続性あるいは永続性

ホド : 神聖な威厳



イエソド：神が為される全ての行為の基本

シャキナー：神の存在

人物

咲倉紀 郁

- ・ 地方の両家のお嬢に生まれる。両親があっさりとした性格のため天然気味に育つ
- ・ 成績は中の中、つまり普通。運動能力もそこそこ
- ・ 吹奏楽部所属もマネージャー的存在、楽器？できません

山階 有士

- ・ 両親は同居しているが生活サイクルが合わないため会話は多くない
- ・ 成績は中の上程度。やればできるがめんどくさがりなため必要以上で勉強しない。運動に関しても同じ
- ・ 主人公だが周りの個性が強くて埋もれがち&ツツコミ多し。ごめん。

梁瀬 紫遥

- ・ 母親は他界、父親と妹とは現在別居中だが、月に2、3回程度は会いに戻っているようだ
- ・ 馬鹿な振りして成績はいい。体力はある方だが球技はあまり得意ではない
- ・ 明るい性格は心の闇の裏返し

柳音堂 沙紀

・華の23歳とは本人談

・過去話あり、メイドとなるまでの一部始終も今後掲載予定

・もともと家で仕込まれていたため、仕事に関しては真面目。色恋やら何やらには過敏。まあまだ二十歳も前半だし、メイドさんは耳がいいって言うし：

咲倉紀 圭

・郁の兄。お坊ちゃん。だがかなりさっぱりとした性格で、良家の人間が持つ特有の雰囲気無く、庶民くさい。

・ファンクラブあり。（構成比率男3割女7割。理由はどこかで語られます）

・有士と同じで、やるときはやる、やらんときはまったくやらない。成績はばらつき気味

咲倉紀 憲吾・里紗

・咲倉紀家当主とその奥様。人当たりがよく、裏表のない性格で世間の評判も良い

・普段も底抜けに明るくて、羽目を外すべきところは思いっきり外す。楽しいことやイベントが大好き

・それでも当主としての仕事（人間関係、自分が地元や都心部などで経営している会社の見回り、経営状態のチェック等々）はしっかりとこなすあたり、有としては尊敬するに値する人物であることは間違いない

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6424m/>

---

f i o r e t t i

2011年10月7日14時31分発行